

武家百人一首と其の類列の百人一首

伊藤嘉夫

百は三けたになる数の頭初のもの。何くれと数のけじめとして、語彙にも百を用いるものが多い。孝は百行の基、百家争鳴、百鬼夜行、酒は百薬の長、百聞は一見に如かず。百発百中、百面相、百貨店はいずれも、くぎりをあげて数の多いことを表わしている。百度詣り、百分比、百首歌は実数の百をあらわす。百にくぎるところに一段落のけじめがある。

和歌における名数は、古今集序で、中国詩学の六義にむかえて和歌を説き、六歌仙をあげて作品をあげつらったのをはじめとして、六歌仙、古今和歌六帖、新六歌仙、六家集、それから六帖題などが出、その六倍の三十六歌仙、三十六番歌合、があるが、百の倍数で、六百番歌合、千五百番歌合と、大きな数が実数としてあらわれる。その百は、けじめとしての手頃な量なので、百首歌というものが古くから行われた。所伝の最も古いものでは、三十六人集中、重之集の、「重之帯刀にて侍りし頃、春宮に歌召しければ」とある、春廿、夏廿、秋廿、冬廿、恋十、雑十あわせて百首になるものである。これにつづき「相摸集」「曾丹集」にも見

え、堀河院の時代の「堀河百首」、更に「永久百首」「久安百首」などいよいよ盛行を見るに至った。西行が諸家に勧進して伊勢神宮に奉った「二見百首」は、諸家の家集にその名が見える。六家集の各作家は、みなその家集に百首歌をとどめている。長秋詠藻に四、月清集に八、拾玉集に、三十三、拾遺愚草に十九、山家集に二、壬二集に十。就中拾玉集は、百首歌の歌集と云ってもよい程である。山家集の百首は、正しくは一種であるが、恋百十首は他書に百首と出しているので二種にした。この外西行は百首を多く詠んでいるのが夫木抄などの歌によって見られる。このように百首歌は当時盛んに行われた。鎌倉時代に入ってもこの風はつづいた。百首歌は、一人の作者が百首を詠むのであるが、一人一首づつの歌を百人集めて百首とする、いわゆる「百人一首」が鎌倉に入ってあらわれるに至った。「小倉百人一首」がこれである。

小倉百人一首成立については諸説あるが、小倉山荘で障子のために、定家が古今の作者を選びその一人一作を書いたという小倉色紙は、は

じめ百枚以上あったものを、為氏が一〇〇枚にえらび伝えたものとされ、応永の頃、すでに「百人一首」の名がこれに付けられていたのである。とにかくこの「小倉百人一首」が「百人一首」の最初のものである。「百人一首」が、室町時代に書物となってから、これにならひ、これを模擬した百人一首が、幾種類か行われた。「後撰百人一首」は、二条良基の撰といわれるが、古抄本もなく、寛政一二(1800)年に虫蝕の歌を補ったという本が、突如板本としてあらわれた。良基歿(三三六)後四一二年のことに係り、うたがわしいとされる。これに続いてあらわれた「新百人一首」(二四三、足利義尚撰)の方が先行するともいわれる。

武家百人一首は、江戸時代の初期から行われていた。古い写本では、跋文の奥に「万治庚子(云々)仲秋」の年記が見え、寛文六(云々)年には板本が出、後刷も度々行われている。しかし撰者を知る手がかりになるものは、写本版本に見えない。静嘉堂文庫蔵の武家百人一首(写本)の頭初欄外に、
松井幸隆曰、武家百人一首といふ物あり、撰

者誰にやと野々宮殿へ伺ひし処に、夫は知らず、取用ひ難きものにて、新百人一首さへ信用かたしと仰らる。

とある。松井幸隆は、京都の町与力で中院通茂門寛永年間（二六〇）頃の人、すでにこの頃から撰者について問題にされていた。この本の奥には

寛保元酉年臯月十日七十七翁静山右百首不知誰人之撰。今熟見之、慕於上古風識愛此道之蘊者撰定歟。不可見過容易之和歌也。因而動老筆書写者。嗜此道者必可為座右之衡也。とあって寛保元（二七二）年頃にも依然撰者については明らかでなかつた。然るに尾崎雅嘉が群書一覽（一八〇）に、武家百人一首の撰者を「播州姫路城主式部大輔榊原忠次の撰なり」としてからは、例えば「武詠聚玉」（静嘉堂本）の扉の所に

私云。古撰本ノ百首ヲ姫路侯忠次ノ撰ト申事、尾崎雅嘉ノ群書一覽ニ依ツテ即是ナリトセリ

と書いてあるので、世にこれが信じられるようになった。「武詠聚玉」は、「姫路侯榊原忠次朝臣撰并抄、桑名庶流源定以補校正」として「武家百人一首抄」（武家百人一首の注釈書）を第一巻上に収め、同下に「所載武者人名系伝」を収めたもの。「武家百人一首抄」の奥には次の識語がある。

右武家百首往々難有之稀于世間。依之詠歌小註如元本書之。又補若干之事略添之尤令喜於

幼童之心已。文政七年（二六四）四月十四日。桑名羽林庶流松平定以識。

第二巻以下に、「統武家百人一首」「後撰百人一首」を収めてある由目録にはあるが、静嘉堂本は卷二以下を欠く。竹柏園本は天理図書館にある筈。

尾崎雅嘉は何によって姫路侯榊原忠次を武家百人一首の撰者としたのであろうか。榊原忠次が、好学の大名で、著述も少くなかつたので、その遺著の中に、「武家百人一首」がまぎれ込んでいたために、忠次の著と誤つたのか、さすれば、斯の人の著としてふさわしく人皆うたがう処がなかつたのではなからうか。なお又、前記「武家百人一首抄」の他の註釈書「武家百人一首溪雲抄」（跡見学園に今井氏書本、静嘉堂に嘉永七年仲秋大野彌次郎通久写本）の、その第一首の註の中に「万治の頃姫路城主式部大輔忠次の撰なり」と云っているのは、万犬実を伝えたものの馬脚であつた。それにもかかわらず、注意すべきは、異種百人一首中においても二種もの註釈書のあるものは「武家百人一首」だけであろう。

万治の頃（二六〇）には、姫路城主式部大輔忠次（享保一七二五—寛政四一九三）は生れては居なかつた。然し、今でも人名辞典などでは、「榊原忠次—享保七—寛政四歿—姫路藩主、儒者。従四位侍従、式部大輔に任ぜられた人で、武家百人一首、御当家記年譜、鎌倉九代後記。続作者部類等の著述がある」と誤をうけている。

或は又、榊原忠次は、姫路藩主ではなく、同名異人の榊原忠次であるとするならば、戦国時代の武人で、榊原忠政の父「榊原忠次」（天文九（一五四〇）歿）がある。時代的には丁度合うようであるが、やや心もとない。

武家百人一首の撰入された武人は、清和源氏の祖、六孫王経基から始めて、足利十一代将軍義澄までを収めており、十二代義晴が将軍になつた大永三年（一五三）以前の撰であらうとおもわれる。

むりに榊原忠次を求めなくても、万治の頃まで成立は下るまいとおもわれる。万治となれば、この百人一首の作者の最後の足利義澄が薨去（永正八年一五二）から一五〇年もたつておる。足利将軍の十二代以下十五代までを除くこともおかしいし、更に、信長、秀吉、秀次、秀頼、家康、秀忠、家光など将軍や、戦国武将たちを撰び入れないのはふさわしくない。

足利第九代将軍義尚撰の「新百人一首」と合本の本が所々に所蔵されているのも古く撰ばれたものと考えられる。この武家百人一首、後述同名のものとは区別して「A本」とよぶ。

最初の板本は「寛文六丙午歲初冬吉辰、下御霊ノ前、谷岡七右エ門板行」と刊記あり、序はなく、跋は古抄本と同じであるが、万治の年号の記載はない。一面ごとに、一人の絵像をのせ、上に歌を書いてある。五十一丁、最後の一丁に跋をかかけた。猶又、寛文一二年（一七二）の重刷本、更に「元祿十六歲六月上旬、林正五

郎板、京都土方町松原下ル町書林菊池喜兵衛刊（七〇三）という後刷本もある。東月南周書。菱川師宣画という。師宣は正徳四年の歿、七七歳であるから、寛文六年は彼の三十足らずの画である。この本とは別に、賞月堂主人著、玉蘭斎貞秀画、安政五年版、江戸本石町十軒店碗屋伊兵衛刊の「武家百人一首」の外題をもつ中本があるが、A本「武家百人一首」の跋の半を序とし、二十三人の歌を入れかえた程度で、著を称する程でない改竄本である。書名が同一であるからまぎれない為B本とする。

江戸時代後期に入って、多くの異種百人一首が盛んに行われ、一種のブームを呈したが、その中で、取上げることの出来るほど「武家百人一首」的なものが行われた。

武家百人一首の古鈔本で菅見に入ったものは数種であるが、いま、跡見学園架蔵の枳形本綴葉装一帖を紹介する。金銀箔をおいた紙表紙に、「武家百人一首」と題簽がある。（後から貼ったもの）墨付十八丁半、歌を各頁三首づつ書き、あわせて百一首を収める。終一丁半に跋を書き、奥に「万治庚子仲冬」とある。

百一首中、五十一首目の歌の、
玉の緒のたえぬばかりにくるしきはひくにて
よらぬおもひなりけり 平貞俊北条

に、朱の懸点をかけ「此哥可除」とあり、名にも懸点をかけてある。このことは、この歌が省略される以前の本の姿を示すもので、原本に近いことを意味するものであろう。寛文六年板本

武家百人一首と其の類列の百人一首

以下には、この歌を載せず、歌の数は百首になっている。因に平貞俊は、執権北条時宗五代の子孫、安芸守時俊の男、五位佐介左京亮で、続千、続後拾、新千載の作者。この歌は続後拾遺恋歌である。

なお、第四〇番目の千葉介平氏胤の歌、
人知れずいつしか落つる涙川逢ふせにかへて
名を流すとも

は、新千載から抄く時、次の歌の下句に誤って続けたものである。はじめ、

人知れずいつしか落つる涙川わたるとなしに
袖ぬらすらむ（二六） 千葉介平氏胤

よしさらば包むもくるし涙川逢ふせにかへて
名を流すとも（二五） 源基氏

と並んでいたもの。「涙川」という字から目移りして次の行の歌の下句を書いてしまったのである。写本は跡見本以前を見ていないが、板本ごとごとくこの誤を踏襲しているから、恐らくは、原本から誤っていたものである。

各歌の出典は概ね勅撰集で、新葉集82、平家物語15・25、太平記56・57、御自歌合96、未詳7・9・23・24・62・98・99・100のあわせて十四首が勅撰集以外である。勅撰集中所出の多い順には、新統古一七首、新後拾一〇首、風雅九首、続拾遺、玉葉各七首、続千載、新千載各六首、千載、新勅、新拾各四首、後拾遺三首、拾遺、詞花、続後撰各二首、金葉、続後撰、続古今各一首あわせて八六首になる。ひたすら勅撰集から抄いたのは、勅撰集を尊んだ時代であり、足

利義政などは勅撰集の撰を奏請したりしているほど、待ち望まれながら、勅撰のことの絶えた時、足利將軍の中には義尚のように和歌愛好の人がおり、新百人一首を撰したりしている。これについて程遠くない頃にこの百人一首が撰ばれたものと思われる。少くとも、異種百人一首のうち、板になった、最も古いものが「武家百人一首」であったのである。

「武家百人一首」が江戸初期に行われ、早く板本になって普及したので、この書が後世に影響するところが多かった。まづ伊達吉村撰の新撰武家百人一首が撰ばれた。これは、板にならず伊達家の秘庫に収められていたものとみえて、明治二八年に仙台文庫叢書六に収め刊行され、修養文庫明教和歌集にも収められた。ついで袖珍文庫「十三種百人一首」中に収めて活版に付された。但し「十三種百人一首」本においては一首不足している。本稿に於いて復刻するのは仙台文庫叢書本を以て底本とした。この他に、松平定以撰、文政七年跋の「後撰武家百人一首」、「続武家百首」が、武詠聚玉に収められている。かつてこの本が竹柏園にあった頃一見したが、詳しくしない。静嘉堂文庫の武詠聚玉は闕本で、これを欠く。（御存知の方はお教え願いたい）

武家百人一首が世に迎えられるにつけ、これによそえた、「英雄百人一首」が、緑亭川柳によって弘化二年（二五）に上梓されたが、これは絵像と歌だけでなく、上欄に小伝逸話をかか

げ、これに呼応して読みもの性を強調したのが大衆の迎える処となつて大当りし「統英雄百人一首」「列女百人一首」「義烈百人一首」と矢つぎ早に同じ書肆から出版した。その売行を見た他の書肆も、また、源満昭が「勇猛百人一首」を嘉永七年（一八五〇）に出版した。これはほとんど「武家百人一首」そっくりなもので、五人をさしかえ、二人の歌をさしかえただけで、経基にはじまり義澄に終るところもそっくりである。この本が出てまもなく安政五（一八五八）年に、賞月堂主人著として「武家百人一首」と同名の書があらわれる。これが本稿におけるB本。これには廿三人のさしかえがある。首尾は同様。更に「義烈回天百人一首」が木版で明治七年に、「武家百人一首」が活版で明治四二年に出版された。これは全く別本である。他の同名本と区別して「C本」とする。

「百人一首」と単にいうと、直ちに「小倉百人一首」のことと理解されることが多いので、今「異種百人一首」と区別していい「小倉百人一首」以外の百人一首の、全文をかかへて纂訂叢刊することを思ひたち、その手はじめに「武家百人一首」とその系列に入る後世の異種百人一首十種を翻刻することにした。「武家百人一首」「新撰武家百人一首」等は、百人百いろの和歌の趣を考へて、撰ばれたものであるが、江戸後期に入つて撰ばれた、緑亭川柳の撰になる「英雄百人一首」以下は、読み物としての書肆の意を迎へて撰編され、その意味で盛行を見た

もので、浮世画師がこれに参加して、緑亭ものは数種以上にのぼつた。

武家百人一首の古抄本を見たのを機縁に、異種百人一首を調査し、各百人一首について原則として本文全歌を活字にしてその全貌をあらわしたいと思う。それは、この度手がけた数種の異種百人一首が、相影響しあつたり、撰者のそれぞれ個性、時代の好尚などを見、中には題名が同じで内容が違つたり、内容が甚だしく近似して題名がかわつたり、版を重ねるうちに題名がちがうなど、ただ目録だけではその正体がわからないので、それらを整理しつつ、小さい解説をつけた。本稿で紹介するのは次の十種である。下は底本。

武家百人一種 (A本)	跡見本古鈔本
新撰武家百人一首	仙台文庫叢書本(活版)
英雄百人一首	弘化二(一八四〇)刊本
列女百人一首	弘化四(一八四七)刊本
統英雄百人一首	嘉永二(一八五〇)刊本
義烈百人一首	嘉永三(一八五〇)刊本
勇猛百人一首	嘉永七(一八五〇)刊本
武家百人一首 (B本)	安政五(一八五八)刊本
義烈回天百人一首	明治七(一八七四)刊本
武家百人一首 (C本)	明治四二(一九〇九)刊本

活版翻刻凡例

- 一、原則として本文全部活版とする。
- 一、序跋あるものはこれを掲げる場合がある。
- 一、本文以外の口絵、挿入文詞、頭註、小伝等

は概ねこれを略す。

- 一、歌は二十一字詰二行とし、その下に作者名を出す。一種の百人一首を三頁以内に組み、残余に解説をつける。

- 一、必ずしも底本の文字遣にこだわらず、漢字をあてる場合がある。歴史仮名遣に従う。

- 一、特に著しい訂正については解説にふれるが、明らかな誤はこれを一一あげない。

○ なお、安政四年刊、笠亭仙果撰、「武稽百人一首」という本がある。(刊年は宮武外骨の「異種百人一首目録」による―跡見本は刊記を欠く。)この本の撰者笠亭仙果の序文の中に、

……忠孝の人一百人を輯めて画伝にものして訓悔の階梯とす。倉皇の間の愚撰なれば、全行の人のもれ、闕行の人も入りたれど、私に虚誕を加へず、悉引証あり、讃歌は甚だ拙陋なるものから、万一に見あやまりてその人の自詠とな思ひたまひそ……

とあつて、百人一首とはいふものの、百人の自詠を集めたのではなく、撰者が一人で百人分の歌を讃歌としてかかけた、いわば史詠百首である。この様なものは、「異種百人一首」とは認めがたい。因にこの本、「本朝武芸百人一首」と題し、嘉永四年米林堂刊の本がある。本文は全く同一であるが、撰者は松亭金水となり、序に「米林堂主人の需に採み集むること一百人、みな悉く詠歌を付し云々」とある。この方が早い。撰者が別人になっている。

武家百人一首

撰者未詳
室町時代成立

- 1 雲居なる人を遙かにおもふにはわがこころさへ空にこそなれ 経基 王
- 2 君はよし行くす多遠しとまる身のまつほどこがあらむとすらむ 贈三位源満仲
- 3 かくなんと蟹のいさり火ほのめかせいそべの浪のをりもよからば 源頼光朝臣
- 4 かたかたのおやおやおやどちいはふめりこのこのちよを思ひこそやれ 藤原保昌朝臣
- 5 君ひかすなりなましかば菖蒲草いかなる根をか今日はかけまし 左衛門尉平致経
- 6 夜もすがらたたく水鶏は天の戸を明けて後こそおとせざりけれ 源頼家朝臣
- 7 都には花のなごりをとめ置きて今日下芝につたふしら雪 源頼義朝臣
- 8 ふく風をなこそその関と思へども道もせにちる山ざくらかな 源義家朝臣
- 9 賤の女がしづはたぬののぬきにうつうのけの布の程のせばさよ 清原武則
- 10 夏の日になるまで消えぬ冬氷はるたつ風やよきて吹くらむ 左衛門尉源頼実
- 11 おもふ事なくてや春を過ぎましようき世隔つるかすみなりせば 兵庫頭源伸正
- 12 ゆく人をまねくか野辺の花すすき今宵もここに旅ねせよとや 平忠盛
- 13 人しれぬ大内山の山もりは木がくれてのみ月をみるかな 従三位源頼政

武家百人一首と其の類列の百人一首

- 14 身のうさも花見し程は忘れき春のわかれを歎くのみかは 伊豆守源仲綱
- 15 今までもあればあるかの世の中に夢のうちにもゆめを見るかな 中納言平教盛
- 16 難波濁芦のまるやの旅ねにはしぐれは軒のしづくにぞしる 参議平経盛
- 17 荒れにけるやどとて月はかはらねどむかしの影は猶ぞゆかしき 平忠度朝臣
- 18 住みなれし古き都のこひしきは神もむかしに思ひしるらむ 正三位平重衡
- 19 なかなかにたのめざりせば小夜衣かへすしるしは見えもしなまし 従三位平資盛
- 20 流れての名だにもとまれ行く水のあはれはかなき身は消えぬとも 左馬頭平行盛
- 21 散るぞうき思へば風もつらからず花をわきても吹かばこそあらめ 平経正朝臣
- 22 まどろめば夢にも見えぬ現にはわするほどの束のまもなし 右大将源頼朝
- 23 伊勢島や汐くむ袖の月かけを浪にのこしてかへるあま 伊予守源義経
- 24 秋風に草木のつゆをはらはせて君がこゆれば関守もなし 平景季
- 25 武士のとりつたへたるあづさ弓ひきては人のかへる物かは 平景高
- 26 夕ぐれは衣手涼したかまとの尾の上の宮の秋の初風 鎌倉右大臣
- 27 よのなかに麻は跡なくなりけりこころのまの蓬のみして 平泰時
- 28 武隈の松のみどりもうづもれて雪を見きとや

- 人にかたらむ 河内守源光行
- 29 いたづらに行きてはかへる年月のつもるうき身に物ぞ悲しき 式部丞源親行
- 30 あたにのみ思ひし人の命もて花をいくたびをしみ来ぬらむ 蓮生法師
- 31 思ひあれば頼めぬ夜半もねられぬを待つとや人のよそに見るらむ 平重時朝臣
- 32 つらかりし春のわかれば忘れられど哀れとぞ聞く初雁の声 平政村朝臣
- 33 梅が香の誰が里わかず匂ふ夜はぬしさだまらぬ春風ぞ吹く 行念法師
- 34 さだめなきしぐれの雨のいかにして冬のはじめを空にしるらむ 真昭法師
- 35 あられ降る雲のかよひち風さえてをとめのかざし玉ぞみだるる 源義氏朝臣
- 36 さびしさは何処もおなじことわりに思ひなされぬ秋の夕ぐれ 武蔵守平長時
- 37 篠の葉にさやぐ霜夜の山風に雲さへこほるありあけの月 佐渡守藤原基綱
- 38 草葉のみ露けかるべき秋ぞとはわが袖しらで思ひけるかな 下野守藤原景綱
- 39 よしさらば我とはささじ海士小船みちひく汐の浪にまかせて 信生法師
- 40 人知れずいつしかおつる涙川渡るとなしに袖ぬらすらむ 千葉介平氏胤
- 41 山のはのみえぬばかりぞわたつ海の波にも月は傾きにけり 素暹法師
- 42 いにしへの野中の清水くまねども思ひいでてぞ袖ぬらしける 常陸介惟宗忠秀

- 43 ゆく末の空は一つにかすめども山もとしく
立つけぶりかな 丹後守藤原頼景
- 44 つれなくて何かうき世に残るらむおもひも出
でぬあり明の月 出羽守藤原宗朝
- 45 不次の根を山より上にかへりみて今越えかか
るあしがらの関 信濃守藤原行朝
- 46 奥津風ふきこす磯の松がえにあまりてかかる
多古の浦藤 藤原 宗泰
- 47 都おもふたびねの夢の関守はおひよびごとの
あらしなりけり 左衛門大夫藤原基任
- 48 散る花の雪とつもらば尋ねこししをりをさへ
やまたたどらまし 源 頼 隆
- 49 忘草ころなるべき種だにもわが身になどか
まかせざるらむ 平宗宣朝臣
- 50 大井川こほりも秋は岩こえて月に流るる水の
白浪 平維貞朝臣
- 51 夢ならでまたはまこともなき物を誰が名づけ
ける現なるらむ 右近将監平義政
- 52 吹きはらふあらしに澄みて山のはの松より高
くいづる月かな 平貞時朝臣
- 53 世をすつる数にさへこそもれにけれうき身の
末を猶頼むとて 左衛門尉藤原頼氏
- 54 峯に立つ雲もわかれて吉野川あらしにまさる
玉の白浪 伯耆権守源頼貞
- 55 見し友はあるがすくなき同じ世に老の命のな
にのこるらむ 右衛門尉藤原範秀
- 56 古郷に今宵ばかりのいのちとも知らでや人の
我をまつらむ 寂阿法師
- 玉ののをのたえぬばかりに苦しきはひく手によ
- らぬおもひなりけり 平 貞 俊
- 57 わが袖のなみだにやどる影とだにしらで雲井
の月やすむらむ 源義貞朝臣
- 58 をしとだにいはいはぬ色とて山吹の花ちる里の春
ぞくれゆく 等持院贈太政大臣(尊氏)
- 59 いつとても待たずはあらねどおなじくは山時
鳥月に鳴かなむ 従二位源直義
- 60 妻恋ひの涙やおちて小男鹿の朝立つをの露
と置くらむ 宝篋院贈左大臣(義詮)
- 61 鶴が岡木高きまつを吹く風の雲居にひびく万
代のこゑ 従三位源基氏
- 62 いにしへにかはらぬ神の誓ひならば人の国ま
でをさめざらめや 右兵衛督源直冬
- 63 春といへば昔だにこそかすみしか老のたもと
に宿る月影 上野介源高国
- 64 とはずとも障るとせめてきかすなよ待つを頼
のみたぐれの空 伊豆守藤原重能
- 65 音だにも秋にはかはる時雨かな木葉ふりそふ
冬や来ぬらむ 源清氏朝臣
- 66 はつ秋はまだ長からぬ夜半なれば明くるやを
しき星合の空 播磨守高階師冬
- 67 梓弓もとの姿は引きかへぬ入るべき山のかく
れ家もがな 陸奥守源信氏
- 68 さだめなき身をうき鳥の水がぐれて下やすか
らぬ思ひなりけり 道誉法師
- 69 いたづらに待つは苦しき偽をかねより知る夕
ぐれもがな 源 氏 頼
- 70 露霜の岡べの真葛うらみわびかれゆく秋にう
づら鳴くなり 左京大夫源氏経
- 71 都にはまだしきほどの時鳥ふかき山路をたづ
ねてぞ聞く 伊予権守高階重成
- 72 うづもれぬ煙を宿のしるべにて雪に汐くむ里
のあま 元可法師
- 73 数ならぬ身はなかなかにうきことを習ひにな
して歎かずもがな 源 直 頼
- 74 たのむかなわがみなもとを岩清水流れの末を
神にまかせて 鹿園院太政大臣(義満)
- 75 かりねするいなな笹原うきふしも知らでや今
宵月にあかさむ 養徳院贈左大臣(満詮)
- 76 静かなるころのうちや松蔭の水よりも猶涼
しかるらむ 源頼之朝臣
- 77 あはざりしつらさをかこつ言の葉にいまだに
ぬるる新枕かな 陸奥守源氏清
- 78 春は猶さきちる花の中におつる吉野の滝も波
やそふらむ 源義将朝臣
- 79 恋ひ死なぬ身のためつらき命ともさてながら
ふる契りにぞしる 陸奥守源棟義
- 80 秋来ぬと萩の葉ならす風の音に心おかるる露
のうへかな 源 貞 世
- 81 日かずのみふるの早稲田の五月雨にほさぬ袖
にもとる早苗かな 多々良義弘朝臣
- 82 心なき尾花がそでも露ぞおく秋はいかなる夕
べなるらむ 源重長朝臣
- 83 澄むは空濁るは地と別れにしそのいにしへは
神ぞしるらむ 勝定院贈太政大臣(義持)
- 84 霜むすぶ野原の浅茅うら枯れてむしの音よわ
る秋風ぞ吹く 権大納言源義嗣
- 85 時鳥待つ宵すぎてつれなくは明くる雲井にひ

と声もがな

源頼元期臣

86 聞きなれし木の葉の音はそれながら時雨にかはる神無月かな
源 高秀

87 かこたじな春や昔の夜半の月わが身ひとつに霞むかけかは
源 詮信

88 夕立の雲の衣はかさねても空にすぎしき風のおとかな
普広院左大臣(義教)

89 思ひ立つ雲のよそめの偽りはある世うれしき山さくらかな
源満元朝臣

90 秋ふかき小野の浅茅のつゆながら末葉にあまの虫の声かな
源 持信

91 みなの川岑よりおつる紅葉ばもつもりて波をまたや染むらむ
正三位源義重

92 一目見しかたちの小野にかかる草の束のままなど忘れざるらむ
源範政朝臣

93 なほざりに詠むべしやは忘れられで物思ふ頃の夕ぐれの空
素明法師

94 さらでだに乾さぬ袖師の浦千鳥いかにせよとて寝覚とふらむ
多々良持世朝臣

95 鳥のねのつらきばかりをうつつにて夢にぞ越ゆる逢坂の闇
平 貞 国

96 けふはまづ思ふばかりの色みせて心の奥をいひはつくさじ
慈照院贈太政大臣(義政)

97 友もなき夜半のまぐらの橘や昔をかたる句ひなるらむ
大智院贈太政大臣(義規)

98 霞とも花ともいはじ初瀬山松原にくもる春の夜の月
常往院贈太政大臣(義尚)

99 日をそへて袖の溱もせきあへず身をしる雨のそらの乱れに
惠林院贈太政大臣(義種)

武家百人一首と其の類列の百人一首

100 月見ばと契りやおきしさを鹿の来る秋ごとに つま恋ひの声
法住院贈太政大臣(義澄)

やまと歌はわが国の風俗として皆人のもてあそびとなれり。武門の身にしては、弓馬のいとなみ繁く、外の学びに心を寄する暇なからまし。されど古今集の序に貫之が書ける言葉に、猛き武士の心をも慰むるは歌なりといへるために、源平二つの家のみにあらず、諸々の武将和歌を連ね待るも多ければ、京極黄門の小倉山荘の障子に書きおかれける数になぞらへて、武士百人の歌を一つづつ書きて、武家百人一首と名づけ侍るにこそ。然あれど歌のよしあしを選び定むるにはあらず。あるは撰集に入りても歌のかず少なく、一人一つ二つのたぐひ多し。或は仮名文に見え侍るなどを、目に触るるを幸にして、唯武将の名高きをもらさず、歌の誉れある人をも捨てがたく書き集めて武士の百の名を顕はし侍らむためならむかし。万治庚子仲冬。

(註1) 新千載集により下句を訂す。底本の句新千載氏胤の次の「よしさらば包むも苦し涙川逢ふせかへて名を流すとも。源基氏」の下句を誤って写したものを。

(註2) この歌の肩に懸点をかけ「此歌可除」とあり。板本に無し。員外の歌。

(註3) 底本、源義政朝臣、撰集によって訂す。

〔解説〕跡見学園蔵「武家百人一首」の江戸時代初期の写本を底本とし、勅撰集等によって校訂した。この書、小倉百人一首に模して撰ばれたもので、古来、姫路城主榊原忠次の撰とされていたが、姫路城主の榊原忠次はこの本の跋の奥の年記よりはるかに後に生れており、撰者とすることは出来ない。恐らくは、この榊原忠次が好んで、多かつた著述と共に、この書が遺され、誤って忠次の撰としたものか、或は同名異人の榊原忠次(天文九、七、四歿)であるかも知れない。しばらく榊原忠次の撰としておく。内容は、六孫王経基から、足利十一代將軍義澄まで武家百人の詠を集めているが、概ね勅撰集から採っている。年代順に排列してあって、最後が、足利將軍をおき、然も十一代將軍を以て最後としている処、撰出に足利時代に重点をおくなどからして、この百人一首は、江戸時代以前の撰であると思われる。寛文六年に板本があるが、江戸期に入つての撰ならば、足利十一代將軍以降の人を割愛する理由が見出せない。

この本、異種百人一首では最も古く刊行されたもので、人々の目にははやくとまったようである。前記寛文六年谷岡七衛門板行のものにつづいて、寛文十二年、更に元禄十六年林正五郎板行のものがあり、写本では、よく「新百人一首」と合冊したものが多いのをみて、二つの百人一首は互に近い時代に撰ばれたものということが出来るようである。どうしても江戸期以前の撰であると思われる。

新撰武家百人一首

伊達吉村撰

- 1 田子の浦に汐波む海士の袖濡れてほすまも知らぬ身の業ぞうき 大猷院贈太政大臣
- 2 秋の野の露さへ寒き草むらになほゆふ霜をまつ虫の声 二位法印玄旨
- 3 わけ濡れし小鹿の跡か一とほり花に露なき秋の萩原 平常縁
- 4 かくばかり遠きあづまの富士の根を今ぞみよこの雪の曙 従三位多々良義興卿
- 5 都出づる名残は誰と知らねどもひかるるとのみ思ふ袖かな 兵部大輔藤原成宗朝臣
- 6 面影にたえずば何と慕はまし花散るあとの峯の白雲 右馬頭大江元就朝臣
- 7 世の中や鳩の浮巢のみだれあしの玉にもなびく和歌の浦風 左京大夫藤原植宗朝臣
- 8 諸ともに月も憂音や忍ぶらむ物思ふ袖に影もはなれず 道灌法師
- 9 ゆく月やこほらぬかたも曇るらん山風落つる水の木の葉に 智閑法師
- 10 頼みこし身は武士の八幡山祈るちぎりは万代までに 平氏康
- 11 山風のはらふ霞も散る花にまたかき曇る有明の空 源氏真
- 12 古里を見果てぬ夢の面影に涙かたしく小夜の中山 参議源忠興入道
- 13 五月雨に軒漏る雫聞きなれてなかくをやむ隙ぞ淋しき 権大納言源頼宣卿
- 14 幾日数木曾の山路の旅衣夢は寢覚めのとこの松風 権大納言源光友卿
- 15 行きくへて峯越す程は山もなしただ一むらの雲の通ひ路 前権中納言源光圀卿
- 16 行く船は島隠れぬも海原や霞のうちによがて消ゆらん 好雪法師
- 17 移らじと思ふだになほ危きは人の心の花のいろく 左近衛中将源正之朝臣
- 18 後も知れ岩切りたつる宮柱動かぬ国は神のまに 主殿頭源忠綱朝臣
- 19 水上の清き流を堰き入れて末も涼しき瀧の白糸 贈従四位下藤原宗矩朝臣
- 20 棹さしてゆく手や寒き川の瀬に初雪積る舟ぞいさよふ 源正利
- 21 入る方の山な恨みそ武蔵野の草にも月の影ぞ隠る 侍従源忠次朝臣
- 22 妻恋ひて野辺も露けき百草の花踏みしだき鹿ぞ鳴くなる 源英法師
- 23 ほのなにも語らふ頃の郭公声を忍びの岡に鳴くなり 左近衛少将源光仲朝臣
- 24 鈴鹿川八十瀬に落ちて行く水の流れも早し五月雨の頃 侍従源光隆朝臣
- 25 百歳に半ばの秋の月もはや共に傾く影をしぞ思ふ 侍従源直基朝臣
- 26 かつぞ聞く寢覚を須磨の秋風に山はうしろの小男鹿の声 藤原政一
- 27 出づるより入る山の端は何処ぞと月に問はばや武蔵野の原 権中納言藤原政宗卿
- 28 厭ふこそ世をば厭はぬ心なれ厭はゞ世をば厭はじ 左近衛少将藤原忠宗朝臣
- 29 草まくら旅行く人の袖さむみあらしにたどるさよの中山 侍従藤原秀宗朝臣
- 30 思へただ神もさこそは守るらめ人の誠の道とほ 侍従藤原光宗朝臣
- 31 朝露の玉響懸けて春の日のながくも結ぶ青柳の絲 藤原宗時
- 32 里の名は伏見の月のよもすがらなほ音立てて衣打つらむ 侍従藤原光茂朝臣
- 33 吉野山梢の花のいろくに驚かれぬる雪のあけぼの 関白豊臣秀吉公
- 34 植ゑ置ける砌の松に君が経む千世の行方はかねて知らるる 権大納言豊臣利家卿
- 35 河岸やくだすもはやき高瀬舟影さし添ふる秋の夜の月 大僧正玄以
- 36 二世とは契らぬものを親と子の別れん袖の哀れとを知れ 三位法印竜伯
- 37 此寺のあるじも今は夏草の露のあととふ小夜の中山 権中納言藤原家久卿
- 38 限りあれば吹かねど花は散るものを心短かき春の山風 参議豊臣氏卿朝臣
- 39 初尾花ほのめかさばやとばかりの風のつてさへ鴟の草莖 長嘯法師
- 40 月影は道のしるべとなるみ濁汐干の末はまだ暗き夜に 源長勝
- 41 松浦川七瀬の鶉舟かざくに乱れて下る夜半のかがり火 藤原忠高
- 42 草の庵もまたあらまじになりやせん露の命のかからざりせば 源重頼

- 43 浦風や葦の八重吹き降る雪になほ冬こもる難
波江の里 菅原親昌
- 44 春の立つしるしは松のそれならで確に三輪の
山の霞める 如元法師
- 45 治まれる時世なりけり玉鉾の道行く人も道を
ゆづりて 平常友
- 46 惜しむぞと唯一時の過ぐるだに思ひし春の暮
るゝ名残を 源守恵
- 47 子を思ふ葦辺の鶴の音にたてて我身ふけ井の
うらみてぞ鳴く 藤原重世
- 48 久方の空も長閑けき年の暮になほ百代の春や
迎へむ 常憲院贈太政大臣
- 49 分け行けば麓の道もあと絶えて山路寂しき夕
霧の空 権中納言源綱条卿
- 50 阿武隈の河波かすむあけぼのに浅瀬や惑ふ春
の旅人 左近衛中将藤原綱村朝臣
- 51 散り浮ぶ木の葉にさへや飛鳥川淵瀬に変わる色
を見すらん 左近衛少将源綱政朝臣
- 52 君を思ふ心は神もうけぬべし祈る我身は数な
らずとも 侍従藤原宗利朝臣
- 53 あだなりと見るがうちにも鳥部野の煙も空に
消えて跡なき 侍従源綱久朝臣
- 54 匂ひ来る風をしるべに咲く梅の花に思はぬ垣
をこそとへ 侍従大江綱元朝臣
- 55 葦きかへていと々菖蒲のねをぞなく昔は遠く
軒の葱に 侍従源直矩朝臣
- 56 雪よりもあかぬ光や玉すだれ花にかかぐる春
のあけぼの 侍従藤原豊房朝臣
- 57 手折りつる袖の色にも移さばや紫にはふ宿の
藤波 侍従源親繁朝臣
- 58 思ふ事なくて見るべき宿もがな憂世にすめる
秋の世の月 侍従源頼元朝臣
- 59 夕立の過ぎぬるあとも露散りて山の緑の色ぞ
涼しき 侍従越智正往朝臣
- 60 逢にも思ひぞ渡る衣川霞たちそふ春のながめ
を 侍従源政直朝臣
- 61 分け行けば野辺の千草の色ながら衣に摺れる
露の月影 左京大夫藤原義泰朝臣
- 62 得ぞ分かぬ木の葉時雨れて山風のさそふ尾上
を渡るむら鳥 宝山法師
- 63 思へただ心の杉の直からば三輪の山もよし
訪はずとも 大膳大夫源重信朝臣
- 64 知られじな太山隠れに年を経て繁き歎きを独
りつむとも 若狭守源直明朝臣
- 65 分け行くも思ひ定めぬ道ならし一方ならず招
く尾花に 源行孝
- 66 静なる御代にならひて老らくの耳に順ふ今朝
の春風 菅原宗冬
- 67 入日さす軒端の山のかたわけて曇る涼しき夕
立の空 藤原忠親
- 68 恨むるもあらぬ憂さはよしさらば其ことわ
りの答へだにせば 源茲明
- 69 今日とてや藻塩も焼かで蟹衣うらめづらしく
磯菜摘むらん 性海法師
- 70 朝ぼらけ志賀の浦舟漕ぎ消えて霞にかかる跡
の白波 源久恆
- 71 雨夜にもさはらぬ影と見し月の日数に曇る庭
の卵の花 源政明
- 72 水無瀬川水の浮霧末晴れて山もと遠く月ぞほ
のめく 紀一輝
- 73 春風も知らぬ隙間をもとめ来て枕に深き闇の
梅が香 坂上建顕
- 74 咲き咲かぬ梢も分かぬ山桜ひとつながめの花
の白雪 源忠興
- 75 折り返へる枝にまれなるもみち葉に遠き山路
の嵐をぞ知る 源善政
- 76 露ぞ今朝花に色そふ月影は宿り捨てたる庭の
籬に 左近衛中将藤原吉村朝臣
- 77 幾度か包むにあまる涙をば袖のわたりにかけ
て頼まん 左近衛少将源忠雅朝臣
- 78 萩が枝は折られぬばかり置き添へて風待つほ
どや深き夕露 侍従大江吉元朝臣
- 79 庭の面はいつしかとはで寂しさのます穂の薄
霜さやかなり 侍従源政邦朝臣
- 80 その原と名には聞えて箒木のありとも見え
積る白雪 侍従源吉里朝臣
- 81 七夕もわれにはまさる契ぞと稀に逢ふ夜はい
かが恨みん 侍従藤原基躬朝臣
- 82 梅の花立枝は余所に霞めども袂にしるく匂ふ
春風 侍従藤原基明朝臣
- 83 海士の焚く煙ならでも春はなほ霞にこむる塩
竈の浦 侍従藤原玄長朝臣
- 84 曳き植えて五十の春の初音より宿にも千世を
契る松が枝 源乗邑
- 85 暗みゆく空は霞に夜をこめて残るも薄き春の
月影 坂上誠顕
- 86 露寒き程も知られて都にはまだ見ぬ山の木木

- のもみぢ葉 丹治重正
 87 明くるより時雨も晴れて行く道に今朝は木の葉ぞ降り代りぬる 源 矩 広
 88 白露はまだ置きあへぬ朝戸出の袖におどろく 秋の初風 藤原直賢
 89 余所に見し雲の一むら移り来てこなたの里も時雨降るなり 源 定 房
 90 憂き事を忘れずながら秋の来て眺望そへたる夕暮の空 越智正倚
 91 徒らに今年も暮れて杉の門何をしるしに身は残るらん 平 元 氏
 92 治まれる世は春なれや国民のなびくも見ゆる青柳の絲 従三位源光長卿
 93 吹くとしも見えぬ浅茅の末葉より露散り初むる今朝の秋風 保山法師
 94 影うつす井手の川波寄せ返りにほふもあかぬ岸の山吹 侍従藤原資親朝臣
 95 木の葉散る音さへそひて神無月雲吹く風ぞ四方に時雨るる 侍従菅原賢長朝臣
 96 いづみ川川風寒し里人のいまぞ打つなる衣かせ山 修理大夫源吉武朝臣
 97 風寒み春とも知らぬ閨の戸に明くる日影ぞ今朝は長閑けき 豊前守丹治直重朝臣
 98 憂き人もなびくと見せよ御注連繩神の忌垣の葛の下風 藤原政森
 99 夜な／＼の月のためとや山風の誘はでも散る峯のもみぢ葉 藤原忠統
 100 色変へぬ常磐の松の影そひて千世に八千代に澄める池水 文昭院贈太政大臣

〔解説〕東京三教書院刊、袖珍文庫第二十三編「十三種百人一首」中に、「新撰武家百人一首」として収めるもの、従四位上左近衛権中将伊達吉村朝臣の撰である。しかしこの書に載せるもの九十九首で、一首を欠く。(29の歌)明治四十三年十二月十八日発行であって、底本はいづれによったかを明らかにしない。新撰は明治以前板本になったものがなく、稿本のまま伝わったものと思われ、「仙台文庫叢書」六(明治二十八年九月刊)の中に活版本として上梓した。仙台叢書は「新撰武家百人一首」と「歌仙作者」が附載されている。この本と「修養文庫」所収の明教和歌中に収めるものが版本として流布している。そして、袖珍文庫に仙台文庫叢書を校合すると、

29 草まくら旅行く人の袖さむみあらしにたどるさよの中山 侍従藤原秀宗朝臣

の一首を仙台文庫叢書中によって補うことが出来る。撰者伊達吉村(天合一三五)は元禄十六年仙台藩第五世の主となり、従四位上左近衛権中将兼陸奥守に任ぜられた。在職四十一年、父祖の業を振張し、奥羽の旧跡を踏査して「観跡聞老志」を撰ばしめ学問所を開いて藩学を基礎を築いた。聴政の余閑、画をよくし和歌を好んだ。歌集に「隣松集」がある。「武家百人一首」につづくものとして「新撰武家百人一首」を撰んだ時代については明らかではないが、内容についてみれば、江戸時代以前の太田道灌、東常縁、蒲生氏郷、大内義興、毛利元就、北条氏

康、今川氏真、豊臣秀吉、前田利家更に江戸時代初期まで生きて居た幽齋、長嘯子をはじめとして江戸開幕以後の徳川初期の武家の歌を輯めた。三代將軍家光を巻頭に六代將軍家宣を巻尾とし、中程に五代將軍綱吉をおいてある。紀伊権大納言頼宣、尾張権大納言光友、水戸権中納言光圀と前にあげた加賀侯の祖君前田利家、仙台藩祖伊達政宗、島津家久をあざない、まんべんなく諸侯の歌で輯められている。柳生但馬守、小堀遠州の歌も見える。吉村が歌人であっただけに、歌品に心をかけた跡がある。内容については、前述のように、江戸以前の人は一割程度で、あとはすべて江戸時代初期の人々を撰んだ。「武家百人一首」を念頭におき、作者の重複をさけ、かつ撰者の、伊達公としての立場も十分に考慮に入れての撰である。江戸末葉にあらわれる異種百人一首のように、明らかに詠者を予想しての撰ではなく、武家歌人として、吉村自身の歌をも加えて撰んだ。自信にみちたものである。あえて板本とはせず、藩の文庫に秘蔵されていたものと思われる。

江戸時代末期に近く、読み物としての異種百人一首が、ブームのように盛行したが、この本や、江戸初期の版の、「武家百人一首」の板本などは歌と、せいぜい画像を出すくらいか、全く、歌そのものだけを示した。「新百人一首」や「後撰百人一首」も同様百人一首につけた小伝、逸話などに支えられるものではない。百人一首そのものである。

英雄百人一首

緑亭川柳輯
弘化二乙巳(八五五)刊

いまや四ツの海波静かにして華陽に馬憩ひ
桃林に牛眠りて弓矢は案山子許に用立、血を
見る度に人は生て其初節句に甲冑は遣ふのみ
なれど治に居て乱を忘れざる意の飴にもと武
士の八十氏人の古へ干戈の中に風流言葉もて
思ひをのべ、或は九死の苦難に和歌を詠じて
一生を得るなどを集め、英雄百首とは号
く。されど上古の歌字数定まらぬを除き、ま
た近き昔のことは恐みて是をのせず。只耳馴
れし事のみなれば、我知る事は人も知り、河
辺に水を商ひ、山中に薪を売るに等しけれ
ど、塵ひぢの麓より白雲かかる山となり、浅
きより深きに至る道理なれば、幼童の心を慰
め、義を勧むる端にもならむかと海士のすさ
びのうろくずひさぐいとまに、磯の藻屑をか
き寄せ、螢雪ならぬ漁火を窓にうつし、佃の
浜びさしにおいて

嘉永元戊申年九月吉日再版 緑亭川柳記

- 1 八雲たつ出雲八重垣つまごめに八重垣つくる
その八重垣を 素盞鳴尊
- 2 あふみの海瀬田のわたりに潜く鳥目にし見え
ねばいきどほろしも 武内宿禰
- 3 みちとせに逢ふことかたき黒駒にのりの心を
今ぞしるべき 聖徳太子
- 4 草も木もわが大君の国なればいづくか鬼の住

武家百人一首と其の類列の百人一首

- 家なるべき 紀 朝雄
- 5 わかれても又廻りくる春ごとに花の都をおも
ひおこせよ 遠江守為憲
- 6 あはれとも君だにいはば恋ひわびて死なむ命
もをしからなくに 六孫王経基
- 7 よそにても風のたよりに我ぞとふ枝はなれた
る花のやどりを 平 将門
- 8 敵をなど敵とはかねて思ひけむ君が情を我が
仇にして 武蔵五郎貞世
- 9 松蔭の波に浮べる月よりもふかくぞたのむ住
吉の神 源 満仲
- 10 かたかたの親の親どちいはふめり子の子の千
代を思ひこそやれ 藤原保昌
- 11 なかなかにいひもはなたで信濃なる木曾路の
橋のかけたるやなぞ 源 頼光
- 12 いつまでも世にありあけのかひなくて月も入
るべき限りこそあれ 相馬太郎良門
- 13 いままではいのちつなぎし駒なれどかくては
綱もたのみすくなし 渡 辺綱
- 14 吹く風をな来その関とおもへども道もせに散
る山ざくらかな 八幡太郎義家
- 15 きふたちけふきてあはれ衣川やぶれしすそ
もさけのぼるらむ 安倍貞任
- 16 我が国の梅の花とは見つれども大宮人は何と
いふらむ 安倍宗任
- 17 あり明の月も明石の浦風に波ばかりこそよる
と見えしか 平 忠盛
- 18 鳴く蛙鶯の音にしきられてゆきもやられぬ関
がはらかな 源 伸正

- 19 かひこそよ帰りはてなば飛びかけりはごくみ
たてよ大鳥の神 平相国清盛
- 20 さざ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山
ざくらかな 薩摩守忠度
- 21 都にはまだ青葉にて見しかどももみち散りし
く白河の関 源三位頼政
- 22 見わたせば色づく敵の木の葉武者秋をまた
で太刀風に散る 一来法師
- 23 宇治川にしづむと見れば弥陀仏誓ひの舟ぞい
とどこひしき 筒井浄妙
- 24 山桜散るを見てこそおもひしれたづねぬ人は
心ありけり 伊豆守仲綱
- 25 君故に身をば省くとせしかども名は宇治川に
流しぬるかな 播磨治郎省
- 26 折々はしらぬ浦路の藻しほ草かきおくあとを
かたみとも見よ 三位中将維盛
- 27 流れなば名をのみ残せゆく水のあはれはかな
き身はきゆるとも 左馬頭行盛
- 28 くれ竹のかけひの道はかはれどもなお住みあ
かぬ宮の内かな 但馬守経正
- 29 君がけふたむけの駒をひきつれて行く末とほ
きしるしあらはせ 梶原平三景時
- 30 昔よりめぐみ久しき神垣にかけて叶はぬ願ひ
やはある 木曾左馬頭義仲
- 31 まぼろしよ夢よとかはる世の中になど涙しも
尽きせざるらん 巴 女
- 32 はやきつる道の草葉や枯れぬらむあまりこが
れて物を思へば 清水冠者義高
- 33 おもひには道の草葉もよもかれじ涙の雨のつ

ねにそそげば

海野小太郎幸氏

34 よしやただとはれてもまたなぐさまむおのれ

あとなき庭の白雪

無官太夫敦盛

35 浮世をば背かばけふそ背かなんあすはありと

も頼むべきかは

熊谷直実入道蓮生

36 法華経の序品をだにも知らぬ身に八巻が末を

見るぞうれしき

北条時政

37 昨日こそあさまはふらめけふはまたみはらし

たまへ夕立の神

梶原源太景季

38 はやくゆきて待つことあればいさぎよしおそ

くていそぐ道は危し

九郎判官義経

39 吉野山花のしら雪踏みわけて入りにし人の跡

ぞこひしき

白拍子静

40 惜しむともよもいつきでも長らへじ身を捨て

てこそ名をばつきのぶ

佐藤三郎継信

41 冬深み峯のあらしのはげしきに雪の花ちるみ

吉野の山

佐藤四郎忠信

42 武士のとりつたへたる梓弓引きては人の帰る

ものかは

梶原平次景高

43 まこも草浅香の沼にしげりあひていづれ菖蒲

とひきぞわつらふ

梶原三郎景茂

44 みちのくのいはで信夫はえぞしらぬかきつく

してよ壺の石ぶみ

右大将頼朝

45 夜ならばこうこうとこそ啼くべきにあさまに

はしる屋狐かな

愛甲三郎季隆

46 かへらざる水の流れやあはれにも消えにし人

の跡と見ゆらむ

上総七兵衛景清

47 科あらむ時にこそあれゆるもなきあたりの人

をいかでいくらむ

畠山庄司重忠

48 けふ出でてめぐり逢はずば小車のこのわのう

ちになしと知れ君

曾我十郎祐成

49 あふと見る夢路にとまる宿もがなつらきこと

ばにまたもかへらむ

曾我五郎時致

50 月影の秋は夜寒になりぬとも誰かは打たむ苔

のさごろも

宇都宮頼綱入道

51 裏切をすると思らば目を付けて敵より先にう

ちはたすべし

朝比奈三郎義秀

52 この雪を分けてこころの君にあればぬししる

駒のためしをぞひく

狩野民部行光

53 ことしげき世のならひこそもの憂けれ花の散

りなん春も知られず

北条泰時

54 勅なれば身をはすてにき武士の八十氏川の瀬

にはたたねど

鏡月坊

55 幾度も思ひさだめてかはるらむ頼むまじきは

我がこころなり

西明寺時頼

56 ふるさとの昔を見ずはもとよりの草の原とや

思ひなさまし

工藤新左衛門入道

57 待てしばし死出の山路の旅の道同じくこえて

浮世かたらむ

普恩寺入道信忍

58 花さかぬ老木の桜くちぬともその名は苔のし

たにかくれじ

人見四郎入道恩阿

59 待てしばし子を思ふ闇に迷ふらむ六つの巷の

道しるべせむ

本間源内兵衛資忠

60 深き淵薄き氷のいましめをこころにかけぬ人

そあやふき

楠河内判官正成

61 ふるさとに今春ばかりの命とも知らでや人の

我を待つらむ

菊池入道寂阿

62 花さかむ頃はいつともしら雲のあるをしるべ

にみよしのの山

63 我が家の風ならなくに和歌の浦の波までかよ

ふ道ぞかしこき

足利將軍尊氏

64 治まれる世にあふ坂の関の戸は月かげならで

さすよしもなし

左兵衛督直義

65 おほくとも四十八にはよもすぎしあみだの峯

にともすともし火

高駿河守師泰

66 梓弓われこそあらめひきつれて人にさへ憂き

目をぞ見せつる

左兵衛佐直冬

67 取るはうしとらねば人のかずならず捨つべき

ものは弓矢なりけり

薬師寺公義

68 わが袖の涙にやどる影とだにしらで雲井の月

やすむらむ

新田左中将義貞

69 皆人の世にあるときは教ならでうきにはもれ

ぬ我身なりけり

佐介左亮亮貞俊

70 かりそめの物語にも武の道は添へな残しそあ

りやうにいへ

畑六郎左衛門時能

71 かへらじとかねて思へば梓弓なき数に入る名

をぞとどむる

楠帯刀正行

72 夢ぞとはつねにいへども目をさます人こそな

けれあはれ世の中

細川右馬頭頼之

73 涼しさを松吹く風にわすられて袂にやどす夜

半の月かけ

伊賀局

74 つらなりし枝の木の葉のちりぢりにさそふあ

らしの音さへぞ憂き

土岐右馬頭氏光

75 人ごとに人に生れば人ならで人にてもなき人

ぞかなしき

今川伊予守貞世

76 君がため世のため何か惜しからむ捨ててかひ

ある命なりせば

宗良親王

- 77 思ひきやいく瀬の淀をしのぎ来てこの波合に
沈むべきとは 源 政 義
- 78 面影は写すもやさしとにかくに命は筆におよ
ばざりけり 普光院義教
- 79 見て歎き聞きとぶらふ人あらば我に手向けよ
南無阿弥陀仏 千葉介胤直
- 80 わが庵は月待つ山の麓にてかたぶく空の影を
しぞ思ふ 慈照院義政
- 81 淋しさの種をぞうゑし宵々に夢おとろかす庭
の萩原 桜井中務基佐
- 82 なき身とは誰も知れども諸共にいまはに及ぶ
事をしぞ思ふ 中村治部少輔重頼
- 83 露おかぬ草もありけり夕立の空よりひろき武
蔵野の原 太田静勝軒道灌
- 84 あるがうちにかかる世をしも見ざりけん人の
昔の猶も恋しき 東下野守常縁
- 85 ことのはに君が心はみづくきの行方とほらば
跡はたがはじ 斎藤持是院妙椿
- 86 おもむかむ黄なる泉の流れにもつひの逢ふせ
は同じ彼の岸 小林筑後守氏則
- 87 越えゆかむ死出の山路はかはるともみつせは
おなじ法の友舟 山名上野介重清
- 88 別れては又あふまでと思ひきやかたみなりけ
り世の乱れ髪 喜家九郎昌邑
- 89 から錦立田の奥にひとむらの緑をのこす竹原
の山 田子時隆
- 90 難波潟入江にわたる風さえて芦の枯葉の音の
寒けき 三好長慶
- 91 あふぐぞよ清く和らぐ源の流れのすゑは千代

武家百人一首と其の類列の百人一首

- もつきせじ 六角義実
- 92 みよや立つ雲も煙も中ぞらにさそひし風のす
ゑものこらず 冷泉隆豊
- 93 命やうき名にかへじ世の中にながらへはつ
るならひありとも 石谷清季
- 94 あしからじよかれとてこそたかほめなど難
波田のくづれゆくらむ 山中主膳
- 95 君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波
もこえなん 難波田弾正忠
- 96 老の波よるよる思ひつづくればむそちの関も
なかばなりけり 三浦義同入道道寸
- 97 君が代は千代に八千代もよしやただうつつの
うちの夢のたはぶれ 三浦荒治郎義意
- 98 樊噲をあざむく武者をあつめても下知につか
すば餓鬼におとれり 大石兵治兵衛
- 99 なかなかに清めぬ庭は塵もなし風にまかす
山の下庵 北条左京太夫氏康
- 100 今日ばかりくもれあふみの鏡山旅のやつれの
影のみゆるに 常徳院義尚

首」に倣い、同書から二十八人を選ったが、歌
はおおむねさしかえた。
編輯は読みものとしての向に傾き、例えば、
山中主膳、難波田弾正忠の処でみると、上杉方
の軍大将難波田弾正が、松山に退却するのを、
北条方の山中主膳が追ひつき、剣をむけて後か
ら「あしからじ……」と詠みかけると、弾正は
これを聞き、引きかへして、この「君をおきて
……」の返歌をした。山中は是に感じて弾正を
見送して引き上げた。弾正は、主人上杉朝定を
松山残して爰で討たれたら、主人を守ることが
出来ない、恥をしのんで敵に後を見せた苦
衷、君に尽くす忠誠に山中は感じたのである。
この歌はもとより古今集の歌ではあるが、急に
臨んでの即妙、凡手のよくする処でないので此
の百首の中に加えたといつて、難波田弾正の歌
のところに
君をおきてあだし心をわが持たば末の松山
波もこえなん（古今20二五）
を出している。これはいささかしい気のもので
あるが、川柳、よく読者へのサービスを心得た
ものとも言えようか。
この「英雄百人一首」は前にのべたように、
緑亭川柳の、合巻本的構成による百人一首で、
いわゆる洛陽の紙価を高からしめたもので、月
々刷って、版が磨滅してほり直す程であった。
この本がきっかけで、十種にあまる緑亭もの百
人一首の盛行を見た。

烈女百人一首

緑亭川柳輯
弘化四丁末(一八四七)刊

夫わが大御国の古より貞女烈婦の世に聞えたる者、数知らぬ迄多けれど、そが中に敷島の道に、志ある輩を集めてよと、飢磨にそむるあながちに、すすむる人のありければ、伊南の海のいなとしもいひあへず、老がれのおほけなくも、糟粕に心を酔はしめ、是かれより撰いたせしに、ちよろづの玉の限りもあらねば、宮柱高き雲井の事は除き、唯鄙の田廬の言の葉、あさりする蟹のさへづり、千賀の塩籠こがれてさまをかへし清き跡、または岩間の水の障りいできしも、思ひの露洩れて元の手結び、又は涙川のみかさ増りて埋藻と沈み、或は流に立る川竹の操正しく、松柏の時雨に色を替へざる類を寄せ、列女百首とは号。且今様の絵をくはへ、幼に教て甲斐かねのかひ有なんと、差出の磯のさし過て、拙筆を添ぬれど、聊、好色淫奔の筋にあらねば、囊穢しとて黄金を捨る事なかれ

弘化四年丁末春新鐫

緑亭川柳記

- 1 旅人のやどりせん野に霜ふらばわが子はぐくめあまの鶴群 平群千左登
- 2 まれに来てとふもさびしき松風をつねにや苔の下にきくらむ 中将 姫
- 3 今はとて別れゆくとも袖ふれし軒のしのぶも我を忘れな 熱田椽采女

- 4 苔の衣雪解の水にすぎてもたもとゆたかにひるひまぞなき 橋の 妙
- 5 なにはがた波路わけつつゆく舟を雲井はるけく人は見ゆめり 阿部照田姫
- 6 しら波のよする渚によをすごす蟹の子なれば宿もさだめず 絵島海女
- 7 住みわびぬ我身なげてんつのくにの生田の川は名にこそありけん 黄名日処女
- 8 うばたまの黒髪ぬいて沫雪のふりてや来ます間なく恋ふれば 都 鳥 玉
- 9 年ふれば我が黒髪もしら川のみづはぐむまで老いにけるかな 檜 垣 姫
- 10 津の国のなにはのことか法ならぬ遊びたはぶれまでとこそきけ 室 宮 木
- 11 千代までの行方をまつのみどり子をけふひき捨てし袖ぞかなしき 伊賀夏蟲
- 12 降らばふれふらずはふらず降らずとてともかわける袖ならばこそ 白 河 捨
- 13 はかなくもけふの別れのをしきかないつかは人をながらへてみむ 傀 儡 靡
- 14 哀れとも仏こそ見めます鏡うき面影の底にうつるを 増 子
- 15 諸共にあさりしものを浜千鳥いかに雲井に立ちのぼるらむ 石見才女
- 16 我が袖にかかる涙をとどめ置きて船は長閑に漕ぎやゆくらむ 成尋法師母
- 17 路遠く雲井はるけき山中にまたとも聞かぬ鳥のこゑかな 笹 子
- 18 たてまつる蓮のうへの露ばかりこれを哀れと

- 19 夏はつる扇と秋のしら露といづれかさきにおきふしの床 野上の班女
- 20 玉手箱中にかけてこのなかりせばふたみにそへて何かあふべき 加茂侍従
- 21 信濃なる木曾路にかけし丸木橋ふみしときはあやふかりけり 都 の 綾
- 22 露ふかき浅茅が原に迷ふ身のいとどやみ路に入るぞ悲しき 袈裟御前
- 23 山深み思ひ入りぬる柴の戸の誠の道に我をみちびけ 横 笛
- 24 今さらになたたび物をおもへとやいつもかはらぬおなじうき身に 実 園
- 25 子を捨つるかたみの卒塔婆いかばかりさらでは何と親をたすけむ 道 女
- 26 玉くしげかけごにちりもすゑざりしふた親ながらなき身とをしれ 都 の 玉櫛
- 27 いなやきじ人にならせるかりころも我が身にふればうきかもぞする 笠縫の民子
- 28 萌えいづるも枯るるもおなじ野べの草いづれか秋にあはではつべき 妓 王
- 29 思はずも秋に逢ひぬることくさの我が身のうへにおひしげるらむ 仏 の 前
- 30 補陀落の海におふなるものなれば子のみるめをば給ふとぞ思ふ 有田の真藤
- 31 いかにせん都の春もをしけれど馴れしあづまの花やちるらむ 熊 野
- 32 はかなしや浪の下にも入りぬべし月の都の人や見るとて 巖島の有子

- 33 四つの緒のしらべにかけて三つ瀬川しづみは
てしと君につたへよ 呉 竹
- 34 忘れずとまづ聞くからに袖ぬれて我が身はい
とふ夢の世の中 江口の妙
- 35 つらかりし涙に袖はくちはてぬこの嬉しさを
何につつまむ 衣 手
- 36 やどりあひおなじ流れを結ぶこそ皆さきの世
の契りなりけれ 手越の千寿
- 37 こころざしあるかたよりの偽りはたが誠より
嬉しかりけり 真 袖
- 38 出づる息の入るをも待たぬ世の中にまた来む
春のたのまればこそ 梶原景季の妻
- 39 君が為いとど命の惜しきかなかかる憂き目を
見せじとおもへば 祝部千枝
- 40 かきくもる涙もかなし今さらに半ばの月を袖
にやどして 半者川浪
- 41 ゆく水に千々の思ひを流しやらば心はずみて
しづけからまし 丹後 局
- 42 見るたびにいとど涙のます鏡恋しき人の影を
とめねば 舞 女 静
- 43 桜さくほどは軒端の梅の花紅葉まつこそ久し
かりけれ 常陸の葉山
- 44 捨つる身に猶思ひ出となるものはとふにとは
れぬ情なりけり 化粧坂の少将
- 45 つゆとのみ消えにしあとを来てみれば尾花か
すゑに秋風ぞ吹く 大磯の虎
- 46 たぐへける鹿のなくねを聞きしより我が身も
ともに夜半のさびしさ 若狭の局
- 47 もの思ひ越路の末の白波も立ち帰る日のあり
- 48 月影をさこそ明石の浦なれど雲井の秋ぞなほ
も恋しき 越の初君 龜 菊
- 49 千代能がいたたく桶の底ぬけて水たまらねば
月もやどらず 千代能
- 50 故郷も今宵ばかりの命ぞと知りてや君がわれ
を待つらむ 菊池寂阿の妻
- 51 書きおきし君が玉章身にそへてのちの世まで
の片見とやせん 左衛門局
- 52 いまさらに背くにはあらず君なくてありぬべ
きかとならふばかりぞ 末 葉
- 53 しらざりし心づくしのいにしへを身の思ひ出
と忍ぶべしとは 探題英時の妻
- 54 たれ見よと形見を人のとどめけむたえてある
べきいのちならぬに 佐介貞俊妻
- 55 秋風にそよぎいでたる萩の声おのづからなる
法のことわり 弁内 侍
- 56 ながめせし花を越路に残しおきて都の春も旅
は悲しき 御 匣
- 57 ひとすちに思ひ切りてや黒髪のかかる乱れの
世をばうらみむ 元 ひめ
- 58 沈むともおなじく越えむ待てしばしくるしき
海のゆめのうき橋 山名氏清妻
- 59 浅ましの身をば立野に捨てられて寝乱れ髪
の櫛のつらさよ 守 尾
- 60 これとても仮初ならぬ別れてはかたみとも見
よ水くきの跡 一休禅師の母
- 61 麻糸のよれつもつれつむづかしや有無の二つ
を早くはなれむ 蛭川親当の妻
- 62 去年の今日別れし時も今とても忘れればこそ
思ひいださめ 太田源吾の妻
- 63 かはりぬる姿見ずとや行く水にうつす鏡のか
げもはづかし 和田於鬼女
- 64 身をつみて人の痛さぞしらせる恋しかりけり
恋しかるらむ 大内貞子
- 65 思ひ川深き淵瀬は早けれどさそふ水には名を
流さめや 奈良義成妹弥生
- 66 黒髪の乱れたる世ぞはてしなき思ひに消ゆる
露の玉の緒 勝 頼 室
- 67 世にへなばよしなき雲も覆ひなんいざ入りて
まし山の端の月 鳥井与七郎妻
- 68 さらぬだにうちぬるほども夏の夜の夢路をさ
そふほととぎすかな 柴田小谷方
- 69 旅衣あらゐの関も隔てしに袖に波よる身をぞ
恨むる 小野於通
- 70 人は皆昔がたりとなるものをよそごとこのみ
聞きやすつべき 小野於伏
- 71 うらやまし人目なき野のきりきりす鳴くも心
のままならぬ身は 小野仕女千代
- 72 ながらへて此の世の闇はよもはれじ死出の山
路のいざ月をみむ 堀りく女
- 73 身を思ふ心に身をばくるしむる身を捨ててこ
そ身をば思はじ 素 心 尼
- 74 いましばしくもるともまた鏡山旅のやつれの
かげもはづかし 花 英 女
- 75 みな人のさらぬ別れのそれならで有りてへだ
つる世をぞうらむる 了 然 尼
- 76 我がおもてうらみて焼くを塩の山あまのたく

- 火と人や見るらむ 雄 禪 尼
- 77 ものいまゐせすばかさまし七夕にわがひとり 寝の衣なりとも 三村徳女
- 78 とはれぬる夜半のかたみとしのばれて恨みし 鳥の音こそ嬉しき 石川よつ女
- 79 人こゝろ松にひとしき物ならば常盤の色をと もに契らむ 高 尾
- 80 ながらへばありつるほどの浮世ぞと思へばの ころ言の葉もなし 糸 女
- 81 名をそれといはずともしれ猿沢のあとを鏡が 池にとどめて 遊女采女
- 82 姿こそ絵には写せど中々に通ふところは筆に 及ばじ 嶋原小紫
- 83 盛りをばよそにおくれて家桜うきにはやきは 落葉なりけむ 島原吉野
- 84 筒井筒いつか大井の水底にふたりながめしか げはわすれじ 安住たよ女
- 85 きぬぎぬのわかれの程の思ひ出でていまだに つらき鳥の声かな 伊勢犬女
- 86 恣ひ死なん我がのちの世をとほであれよ迷ふ をせめてかたみとせん 刈 藻
- 87 さきをむる外山の桜匂ひ来て人おどろかす春 の朝風 小野寺丹子
- 88 糸による物と聞きしが別れ路の我が名にくる る涙なりけり 白 糸
- 89 愛づる人たをりそ花のをしければ只見るのみ ぞ家づとにせよ 園 女
- 90 同じ枝をいかにしぐれのふりわけて青葉がな かに紅葉しぬらん 苗村りん女

- 91 はるばると遠き吾妻に隅田川たえぬ流をいつ までか波む 九 重
- 92 つねにゆく道ならばこそ世をうみのあまのの りたる船もたのまめ 井上通女
- 93 いとせめて手向くる水にうつれかし心ばかり にうかぶ面影 た ね 女
- 94 おどろきて見はてぬ夢の名残にもせめてかひ ある山ほととぎす 花 扇
- 95 よそに見て思ふもつらし身のむかしうき川竹 のさとのゆふべは 嶋原大橋
- 96 降る雪につま木の道も埋もれて今朝は折りた く柴の袖垣 慈 門 尼
- 97 する人もなき深山木のしたわらびもゆともた れか折りはやすべき 下 蕨 久 女
- 98 世の中は飛鳥の川と聞きしかど身のうき瀬こ そかはらざりけれ 矢部正子
- 99 雪ならば梢にとめてあすも見む夜半のあられ の音のみぞして 祇園梶女
- 100 常盤なる松も色そふ時を得て幾千代春のさか えをか見む 玉 瀾

人一首を編輯した。「英雄百人一首」が、玉蘭斎貞秀画であったのを、これは北斎と豊国の画にした。人選にも、中将姫、絵島海女、菟名日処女、檜垣姫、成尋母、袈裟、横笛、仏、妓王、静、大磯虎、弁内侍、小野お通、玉瀾など物語を持つ女性を取り上げ、上欄にそれぞれ小伝と逸話をかけ、読みものとしての興味と効果をあげている。中には、中将姫の歌として出すまれに來る夜半もさびしき松風をつねにや台の下に聞くらん

は中将姫の歌でなく、新古今集に「定家朝臣母みまかりて秋、法輪寺にこもりて嵐のいたく吹きければ」と詞書して俊成の詠んだ歌である。斯うした誤もある。上欄の文は簡明でこの本の性格を決める。最後の玉瀾の上欄を掲げる。

玉瀾名は町子といひて京祇園林の百合子の娘也。池大雅の妻となる。夫大雅は諸芸に秀でたるが故に、町子もその業を同じくす。画をよくする故、大和の柳里恭に玉瀾の名を貰ふ夫と共に哥の事にて堂上方へ参るに、玉瀾の名美しければ御内の女房達これを見むと今や今やと待ち居たるに、思の外木綿布子の糊ごはなるを着て手に肴籠をさげ、鄙びたる姿なる故、聞きしに似ぬ者なりと人々驚きしことあり。夫大雅三味線をひきうたへば、玉瀾筑紫琴を合せて古びたる歌をうたひて、夫婦共生涯風雅に樂しみし人也。又この歌は松樹千年縁といふことを詠みていとめでたき歌なれば爰に撰りて加へ侍りぬ。

〔解説〕撰者緑亭川柳。葛飾卍老人、一陽齋豊国画。弘化四年丁未正月刊。東都書肆山口藤兵衛（錦耕堂）刊。袋綴中本を底本とした。口絵・肖像画、上欄の記事を省略し、序及び本支を翻刻した。

この本、先に川柳撰で弘化二年上梓した「英雄百人一首」が、好評で版を重ねるにつけて、同じ様式で、これに対応するものとして列女百

続英雄百人一首

緑亭川柳輯
嘉永二己酉(一八四九)刊

- 1 都には花の名ごりをとめおきてけふした芝につたふ白雪 伊予守頼義
- 2 賤の女がしづはた布のぬきにうつうの毛のぬのほどのせばさよ 清原武則
- 3 日もくれぬ人もかへりぬ山里は峯のあらしの音ばかりして 右衛門尉源頼夷
- 4 今日までもあればあるかの世の中に夢のうちにもゆめを見るかな 平教盛
- 5 住み馴れし都のかたはよそながら袖に浪こす磯の松風 平知盛
- 6 住みなれし古き都の恋ひしきは神も昔に思ひ知るらめ 平重衡
- 7 五月闇くらはし山の時鳥すがたを人に見するものかは 後藤守長
- 8 浦づたへ波のよるよるぎつれども今ぞはじめてよぎめをぞみる 武蔵坊弁慶
- 9 霰降る雲の通ひ路風さえて乙女のかざし玉ぞ乱るる 武蔵前司義氏
- 10 武隈の松も縁もうづもれて雪をみきとや人にかたらむ 源光行
- 11 いたづらに行きてはかへる年月のつもるうき身にもぞ悲しき 源親行
- 12 吹き払ふ嵐にすみて山の端の松より高くいつる月かげ 北条貞時
- 13 人しれずいつしか落つる涙川あふせにかへて名をながすとも 千葉新介氏胤

- 14 石清水たえぬ流れをくみてしるふかき恵みぞ代々にかはらぬ 足利義詮公
- 15 武士のこれや限りのをりをりも忘れざりにし敷島の道 阿波将監和氏
- 16 鶴の岡木高き松を吹く風の雲井にひびく万代のこゑ 左馬頭基氏
- 17 さだめなき世をうき鳥の水がくれて下やすからぬ思ひなりけり 佐渡判官道誉
- 18 わきてたが頼む心の深き江にひける菖蒲ぞねとはしらなん 北畠准后親房
- 19 初秋はまだ長からぬ夜半なれば明るるやをしき星合のそら 高階師冬
- 20 梓弓もとのすがたは引きかへぬ入るべき山のかくれがもなし 武田信武
- 21 さてもそのありしばかりを限りとも知らで別るる我ぞはかなき 山名氏清
- 22 春はなほ咲きちる花の中に落つる吉野の滝も波やそふらむ 斯波義将
- 23 首だにも秋にはかはる時雨かな木の葉ふりそふ冬や来ぬらむ 源清氏
- 24 日かずのみふるの早稲田の五月雨にほさぬ袖にもとる早苗かな 大内介義弘
- 25 咲く時は花の数には入らねども散るにはもろき山桜かな 篠川持仲
- 26 咲きてこそ人もさかりは見るべきにあなうらやまし朝がほの花 足利義勝公
- 27 なかなかに九十折なる道たえて雪に隣の近き山里 伊達大膳大夫
- 28 よろこびの世にあふみとはなりもせで青野が

- 原の露と消えまし 春王丸
- 29 あひ川やそでをひたして行くさきもたる井の露と消えやはてなん 安王丸
- 30 昔見し垂井の水のかはらぬに写れる影のなかはるらん 上杉安房守憲実
- 31 さらぬだにほさぬ袖師の浦千鳥いかにせよとて寝覚めとふらむ 大内修理大夫持世
- 32 藻塩草かくとは誰かしら露の消えしにつけてぬるる袖かな 細川勝元
- 33 咲きにほふ花たちばなも君ならで誰に御階の梢ならまし 二階堂判官政行
- 34 それまでの契りなりしを末の松波こさじとも思ひけるかな 安富九郎元秀
- 35 都出づる名残は誰としらねどもひかるとのみ思ふ袖かな 伊達成宗
- 36 うかりける都に何の情ありて忘れぬ夢の残るおもかげ 畠山義就
- 37 たよりなき外山にすみて下枝をも折ることかたき峯の椎柴 大内左京大夫政弘
- 38 日をそへて袖の溲もせきあへず身をしる雨のそらのみだれに 足利義植公
- 39 うきふしもかきつけおかば人や見むかるとめしも昔ありきと 多々良義興
- 40 なしといひまたありといふことの葉や法のことの心なるらむ 細川入道常垣
- 41 人はたださし出ぬこそはよかりけれ軍にだにもさきがけをせず 三木牛之助
- 42 秋風の至り至らぬ山蔭にのこるもみぢも散らずやはある 大内隆道

- 43 末のつゆもとの雫にしるやいかに終におくれ
ぬ世の習ひとは 右田右京亮隆次
- 44 白露の消えゆく秋の名残りとかやしばしはのこ
るすゑの松風 岡部右衛門大夫隆景
- 45 風をあらみ跡なきつゆの草の原散りのこる花
も幾ほどの世ぞ 民部丞右信
- 46 ありといひなしといはむも花紅葉ただかり初
の言の葉のいろ 平賀新四郎隆保
- 47 何を惜しみなにを恨みむもとよりもこのあり
さまの定まれる身に 陶尾張入道全轟
- 48 有りと聞きなきと思ふも迷なりまよひなけれ
ば悟りさへなき 山崎勘解由隆方
- 49 思ひきや千歳をかけし山松の朽ちぬる時を君
に見むとは 伊香賀民部大輔
- 50 かけてしも頼むはもりのしめだすき命一つに
二つまきして 渡辺可性
- 51 名を惜しむ人といふとも身を惜しむをしさに
かへて名をば惜しまじ 宗 阿 弥
- 52 数ならぬ心のがになしはてじ知らせてこそ
は身をもうらみめ 武田左馬介信繫
- 53 さそふとも何かうらみむ時きては嵐のほかの
花もこそ散れ 多々良義長
- 54 川舟をとめて江口のあけくれに問はむともせ
ぬ人をまつかな 三好宗三
- 55 よしや今頼まずとも言の葉のかはるが末に
思ひあはせよ 光源院義輝公
- 56 消えぬとも其の名や世々にしらま弓引きてか
へらぬ道芝の露 香川兵庫介
- 57 残る名にかへなば何かをしむべき風に木の葉
の軽きいのちを 己斐入道師道
- 58 梓弓張りて心は強けれど引く手すくなき身と
ぞなりぬる 細川澄之
- 59 うたふ夜の暁深く声ふけて神代ながらの鈴の
声かな 安宅木冬康
- 60 世の中に春なかりせばいかでかは花のかけに
て君にあひみむ 松永弾正忠久秀
- 61 生れ来し親子の契りいかなれば同じ世にだに
へだて果つらむ 福井小次郎政家
- 62 さざ波や志賀のうらはにすむ月をいかが見る
らむ雲の上人 浅井長政
- 63 君が代の時にあひあふ糸桜いともかしこきけ
ふの言の葉 朝倉義景
- 64 これやこのうき世の外の春ならむ花のとほそ
のあけぼのの空 鈴木飛彈守重幸
- 65 命より名こそ惜しけれ武士の道をばたれもか
くや思はむ 森迫三十道親政
- 66 澄月のしばし雲には隠るとも己が光は照らさ
ざらめや 大島民部澄月
- 67 かりそめの雲隠れとは思へども惜しむならひ
ぞ在明の月 大島筑前守照屋
- 68 人といふ名を借るほどや末の露消えてぞかへ
るもとの雫に 二村修理亮元親
- 69 青柳のいとくり返すそのかみは誰かをだまき
のはじめなるらむ 大江元就
- 70 暗きよりくらき道にも迷はじな心の月のくも
りなれば 手 友 梅
- 71 松山に消えなんものを末の露おちても水のあ
はれうき身は 甫一檜校
- 72 いかにせん秋のたのみもかれはてて露のみひ
とつおきぞ頼ふ 清水伯耆守清久
- 73 武士の山路わけ入る小手の上の露にもやどる
夜半の月かけ 白子左衛門
- 74 今はただ恨みもあらじ諸人の命にかはる我身
とおもへば 別所小三郎長治
- 75 命をも惜しまざりけり梓弓末の世までの名を
思ふとて 別所彦之進友之
- 76 君なくばうき身の命何かせんのかりて甲斐の
ある世なりとも 三宅肥後入道治忠
- 77 夏山の遠き梢の涼しさを野中の水のみどりに
ぞみる 武田勝頼
- 78 さえのぼる月にかかれる浮雲のすゑ吹きはら
へ四方の秋風 織田信長公
- 79 そのきはに消え残る身のうき雲もつひには同
じ道の山風 松田平介勝忠
- 80 武士のとり伝へたる梓弓かへるやもとの栖な
るらむ 吉川経家
- 81 浮世をば今こそわたれ武士の名を高松の苔に
のこして 清水長左衛門宗治
- 82 うちむすぶ太刀の下こそ産屋なれただ切りか
かれ先は極楽 川上左京
- 83 きらばきれ焼刃にかかるものもなし本来心に
かたちなれば 筑紫晴門
- 84 流れての末の世とほく埋れぬ名をや岩屋の苔
の下水 高橋紹運
- 85 打つ太刀のかねの響きは久かたの天つ空にぞ
聞えあぐべき 三原紹心
- 86 世の中をめぐりはてぬる小車は火宅の門を出

るなりけり

佐久間盛政

87 それぞとも人にしられず憂きものは身を心と

もせぬ世なりけり

柴田修理亮勝家

88 たらちねの名をばくたさじ梓弓いなばの山の

つゆときゆとも

神戸信孝

89 筒井筒つつ井の底の清水かけ結ぶ手多きけふ

の明雲

筒井順慶

90 名ばかりは沈みもはてぬうたかたのあはれな

がとの春の浦浪

山名禪高

91 嬉しさのありとや人の思ふらむうきをうきと

も歎かれぬ身は

北畠信雄

92 武士のやたけ心を異国のはてのはてまでしら

せけるかな

日下部与助元五

93 越えぬべき山路をいかにふる雪のみなれし鎧

袖おもるなり

金上遠江盛備

94 名にしおふ長門の海を来てみればあはれをそ

ふる春の浦波

佐々陸奥守成政

95 みな人はわたりはてぬる世の中は我身ぞもと

のままの継橋

吉川元長

96 まもれ猶君にひかれて住吉の松の千年を万代

のすゑ

北条氏政

97 治まれる代をこそあふけ九重の今宵の月をみ

るにつけても

小早川隆景

98 いにしへも今もかはらぬ世の中に心のたねを

のこす言の葉

従二位法印幽齋

99 ささずともたれかは越えむあふ坂の関の戸う

づむ夜半のしら雪

藤原政宗

100 吉野山たれとむるとはなけれども今宵も花の

かげにやどらむ

豊臣秀吉公

武家百人一首と其の類列の百人一首

〔解説〕「続英雄百人一首」緑亭川柳輯、諸名

画集筆、東都書肆錦耕堂刊。干時嘉永二年巳酉

正月発版、馬喰町山口屋藤兵衛梓の袋綴中本を

底本にした。諸名画は、口絵及び1〜10前北齋

卍老人。21〜40一勇齋国芳、41〜40玉蘭齋貞秀

・61〜80柳川重信・81〜100一陽齋豊国である。

自序、武陽金水処士関口東作漢文序。同序詩、

及び口絵を略し、本文だけを翻刻する。上欄の

記載は割愛するが、前掲川柳輯の百人一首の例

によって小伝と逸話である。「英雄百人一首」

に対しては「烈女百人一首」を二年後の弘化四

年に上梓したが「英雄百人一首」は、その広告

文によると此書、諸君思召に叶ひ年々に出、月

々に行はれて、弘化二巳年春より四年の間絶間

なく摺出し近來稀なる大あたりに付、なほ「此

度増補いたし、板木を彫あらため紙摺等精密に

相製し申候……相かはらず御求御高覧の程奉希

候」などとあって、英雄、列女で一對としよう

としたのを、更に「続英雄百人一首」を輯める

ことになった。さし絵も玉蘭齋だけでなく、前

北齋卍老人はじめ一流をそろえた五人が分担執

筆という豪華な顔ぶれである。更に、広告文に

「此書前に著して大いに世に行はるゝ英雄百人

一首にならひて、往古より永祿天正の頃までの

名将勇士のよみ歌を集め文武の誉れ勇強のいさ

をし忠孝の物語をしるし戦国の事跡を抄略して

編輯したる古今面白き珍書なり」この書も、世

に大に行われた。上欄の小伝逸話を書く様式

が読物として世に迎えられ川柳撰の百人一首は

次々と世に行われたのであった。英雄百人一首

には、白拍子静、巴女、伊賀局の三女性を入れ

たが、続には女性はない。これは二書の間に列

女百人一首を出版した関係もあったであろう。

数ならぬ心のとがになしはてじ知らせてこそ

は身をもうらみぬ 武田左馬介信繁

上欄の小伝によれば左馬介は信玄の弟である。

この歌について何も記していないが、この歌は

西行の作である。どういふいきさつで誤ったの

かわからない。英雄百人一首の場合における古

今集の歌を、意識に入れつつその人の項に出し

たのとはちがう。左馬介の小伝逸話は、

武田左馬介信繁は信玄の舍弟也。兵学に秀で

軍立功者なる故、信玄片腕の如く思ひ大事の

場所へは斯人を備させしと云。信繁息子遺書

の中に戦場に於て聊も未練すべからず、生き

んとすれば死し必ず死んとすれば則生く。忠

節の臣を忘るべからず、善悪同じうすれば忠

臣倦む。褒美は大細によらず、即ち感すべき

也。深く思立つ義あり共、余儀なき意見に付

ては其意に任すべし。無行義の人に近付べか

らず。其人を知るに其友を見よ。人は賢に馴

れよ、賤きにふるる事勿れ。花中の鶯舌は花

ならずして香し、是等の事数ヶ条あり。永祿

四年九月十日川中島合戦に左馬介左備にて旗

下手詰の勝負あり、甲州方軍難儀に及ぶ。山

本勘介鶏野源五郎ら討死す。信繁も討死して

勇名を残す

とある。

義烈百人一首

緑亭川柳輯
嘉永三(一八五〇)刊

- 1 君が代はなほしもつき住吉の松はももたび
生ひかはるとも 源実朝公
- 2 時鳥なほ一こゑを思ひ出でよおひそのもりの
夜半のむかしを 紀伊守範光
- 3 夏の野の草下がくれ行く水のたえぬ思ひはあ
るとしらずや 八田知家
- 4 つらからば我も心のかはれかしなど憂き人の
恋しかるらむ 卿の君
- 5 嬉しさも都に出でしそはいかに今は帰りてか
たるおひせを 文覚上人
- 6 ゆふされば玉ぬく野辺の露ながら風にまづち
る秋萩のはな 阿野全城
- 7 よしさらば我とはささじ海士小舟みちひく汐
の波にまかせて 塩屋右兵衛尉信生
- 8 昔にもならざる夜半のしるしにはこよひの月
し曇りぬるかな 平泉助公
- 9 高野山峯の嵐の烈しくも木の葉はこの後の
かたみに 熊坂張範
- 10 来ぬ人の面影さそふかひもなしふければ月を
なほ恨みつつ 北条朝時
- 11 片岡にふせる旅人あはれ今たづぬる里に宿も
さだめず 白拍子微妙
- 12 あぢきなく子日にもれし野辺の松いつかひか
れて春にあふらむ 松島局
- 13 篠の葉のさやぐ霜夜の山風に空さへ氷るあり
あけの月 佐渡前司基綱

- 14 吹く風にさそはれてゆく浮雲のこころのかる
き身こそやすけれ 高橋種次
- 15 思ひあれば頼めぬ夜半も寝られぬを待つとや
人のよそに見るらむ 駿河守重時
- 16 寝ぬに見し昔の夢の名残とて老の涙にのこる
月かげ 東胤行入道素暹
- 17 草葉のみつゆけかるべき秋ぞとは我が袖しら
で思ひけるかな 尾藤景綱
- 18 木綿かけて卯月にまつる神山のならの木蔭に
夏は来にけり 上野十郎朝村
- 19 一声に明るるならひの短夜も待つにひさしき
ほととぎすかな 北条政村
- 20 頼むるをまたいつはりと思ひてもなお忘れ
ぬ夕ぐれ空 武蔵守長時
- 21 見し友もあるがすくなきおなじよに老のいの
ちの何残るらむ 小中範秀
- 22 むら雲の跡なきかたもしぐるるは風をたより
の木の葉なりけり 宗尊親王
- 23 けぶり絶えてすゝけたる身もあるものを蚊遣
りに白き夕顔の花 土佐大平
- 24 訪はずとも障るとせめてきかずなよ待つをた
のみの夕暮の空 上杉重能
- 25 峯にたつ雲もわかれて吉野川あらしにまさる
花のしら波 土岐伯耆守頼貞
- 26 いたづらに待つは苦しきいつはりをかねてよ
り知る夕暮もがな 六角左衛門氏頼
- 27 都にはまだしきほどの時鳥ふかき山路をたづ
ねてぞ聞く 大高重成
- 28 おほかたの年の暮ぞと思ひしに我が身のはて

- も今宵なりけり 道場坊祐覚
- 29 しのばれむ折ふしごとの言の葉をあはれ残せ
る水莖のあと 菊池次郎武士
- 30 世の憂きもつらきもしのお思ひこそ心の道の
まことなりけれ 楠正行の母
- 31 そむきてもなほ忘れぬ面影はうき世のほか
のものにやあるらむ 北畠顯家夫人
- 32 聞きなれし木の葉の音はそれながら時雨にか
はる神無月かな 佐々木高秀
- 33 露霜を岡辺の真葛うらみわびかれゆく秋を鶉
なくなり 斯波氏経
- 34 山蔭のくらきやみ路に迷はなんつみの川に
身を沈めなば 藤実勝夫人
- 35 をさまるもことわりなれや君が世の恵みつき
せぬ敷島のみち 大館左馬介氏明
- 36 またこむとたのむの雁の別れ路は待つま久し
き名残なりけり 脇屋義治室
- 37 数ならぬ身は中々にうきことをならひになし
て歎かずもがな 赤松信濃守直頼
- 38 たのむかな我がみなもとを石清水流れの末を
神にまかせて 義満公
- 39 思はずよはなをかたみの嵯峨の山雪の跡とふ
千代のふる道 細川満元
- 40 霜むすぶ野原の浅茅うら枯れて虫の音よわる
秋風ぞ吹く 義嗣公
- 41 世を捨つる数にさへこそ洩れにけれうき身の
末を猶たのむとて 大森左衛門尉氏頼
- 42 一目見しかた野の小野に刈る草のつかのまも
など忘れざるらむ 今川上総介範政

- 43 さなきだに五つの障ありと聞く我よりむかふ
罪いかにせむ 大懸入道禅秀室
- 44 花はいかにつらき嵐と思ふらんつねにかはらぬ
今年なれども 足利義照
- 45 うきふしのかたみもとめずおきてゆく朝露き
えぬ道のささ原 蛭川新右衛門親当
- 46 故郷をかり寝の旅の夜嵐に芭蕉ならねど夢は
破るる 今出川義視
- 47 さめやらぬ夢かとぞ思ふうき人の煙となりし
そのゆふべより 園 生
- 48 かへり来む君が為とや古郷の花も八重たつ錦
なるらむ 浜豊後守康慶
- 49 立ちかへりさこそと今を思ひやるころの道
やおなじふる里 安富勘解由元盛
- 50 君が為民のためぞと思はずは命を惜しむこと
もあらなむ 吉川経基
- 51 花さかぬ今のうき身も古へも身のなるはては
かはらざりけり 若槻伊豆守長澄
- 52 余所にのみ見てやは帰る桜花手折りてかざす
けふの輩 尼子経久
- 53 えにしあれや是れぞ限りと思ひしもまためぐ
りあふ袖の月影 六角氏綱
- 54 いづれぞとわかぬ木ずゑの白雪を手にとるか
らにしるき梅が枝 義 晴 公
- 55 捨てかぬ人も捨てればすつる世になど捨て
られて捨てかぬる身ぞ 相良武任
- 56 思川沈む水屑も浮かむ瀬をみのりの舟にかけ
てたのまむ 神西元通妻
- 57 残るとも幾ほどの世を経てましか草葉にもろ
き露の玉の緒 同召仕お才
- 58 何をかは恨みやすらんすむ月ののぼればくだ
る世をぞ思ひて 斯波義銀
- 59 植ゑおきし宿の藤なみ心あらば今こん春は咲
きな匂ひこそ 土佐兼定
- 60 霧つつむ大みね山のもみち葉も嵐やけふの敵
なるらむ 大内常姫
- 61 遠き世のためしをかけて思ふかな心なぐさの
はまの夕波 足利義昭公
- 62 先きだちし小萩がもとの秋風やのこる小枝の
露さそふらむ 鳥居兵庫介
- 63 吾が君の命にかはる玉の緒の何いとひけむも
ののふの道 鳥居強右衛門勝高
- 64 あぢきなやもろこしまでもおくれじと思ふこ
ころは昔なりけり 新納武蔵守忠元
- 65 大空はただ其の儘におのづからかけず障らず
道のもとなり 箕作義賢入道承禎
- 66 はてし憂き心もしらで朝夕になれにし宿の秋
の初風 吉川駿河守元春
- 67 のちの世の道も迷はじおもひ子を我身にそへ
て行末のそら 別所山城守室
- 68 もろともに消えはつるこそ嬉しけれおくれ先
だつならひなる世に 別所長治室
- 69 命をも惜しまざりけり梓弓末の世までの名を
思ふとて 別所彦之進室
- 70 滝つ瀬に散りてわかるる桜ばな流れの末にま
たやあふらむ 香川兵部大輔春継
- 71 うき雲はよしさそふとも朝あらししばしな吹
きそ花の真さかり 土岐光忠
- 72 弓取の数に在るさの身となれば惜しまざりけ
り夏の夜の月 明石儀太夫
- 73 消えて行く露の命はみじか夜のあすをもまた
ず日の岡の峯 斎藤内蔵介
- 74 今爰にむそち余りの日の数を只一時にかへし
ぬるかな 柴田の末森
- 75 思ひきや竹田の里の草の露今もろとみにきえ
んものとは 同 息 女
- 76 水茎にすぎにしことをとどめずはさりし昔を
いかで知らまし 滝川一益
- 77 なかなかにきゐではてなん唐衣たが為に織る
はたものの音 宇都宮鎮房女
- 78 天地の清き中より生れ来てもとの住家にかへ
るべらなり 北条陸奥守氏輝
- 79 さつきあめ音無し川は名のみにて岩波たかく
ききわたるなり 田中吉政
- 80 山里は雪かきくらしふる年を空にのこして春
は来にけり 秋田銅蚪入道
- 81 結びしに解くる姿はかはれども氷のほかの水
はあらめや 北条氏直
- 82 斯くあらむ行方もしらでたのみつる我が心を
ばたれかかこたむ 菊 子
- 83 染めやすきよその梢になれなれてつれなきか
げにふる時雨かな 武田の松子
- 84 かけてけふみゆきをまつ藤浪のゆかり嬉し
き花のいろかな 豊臣秀長
- 85 待てしばし我ぞわたりてみつせ川浅み深みを
君にしらせん 蒲生大膳
- 86 思ひわび松のあらしにとはれても猶つれなき

はうき身なりけり

太田三葉齋

87 名のために捨つる命はをしからじつひにとま

らぬ浮世とおもへば

平塚伊益

88 また来むと誰にもえこそいひおかし心にかな

ふ命ならねば

塙直之

89 みつのわに清くきよきぞ唐衣くると思ふなと

るとおもはじ

二蔵主

90 死出の山慕ひてぞゆく契りおきし君が言葉を

道のしをりに

伊賀崎中務妻

91 梓弓ひき別れにしけふよりはなき身のかずと

たづねても見よ

山崎左馬介室

92 いにしへのその名ばかりはありながら姿は波

の春のあけぼの

羽柴頼隆

93 世の人のくちははかかる露の身の消えては何

のともあらじな

筒井定次

94 人しれぬとばかりゆるす心かなあざむきはて

んおのれのみこそ

木下秀俊

95 命やうき名にかへて何ならむまみえぬ為に

おくる黒髪

木下長嘯子室

96 常にこそ曇るもいとへ今脊ぞと思ふは月のひ

かりなりけり

徳善院玄以法印

97 をさまれる御代ぞと思ふ松風に民の草葉の猶

なびくなり

秀次公

98 八千代ふれ只辛崎の一つ松植ゑしわが身は雲

がくるとも

佐々木六角義卿

99 先だつは同じ限りのいのちにもまさりて惜し

き契りなりけり

細川忠興夫人

100 としどしに盛り久しき桜花つきぬ契りも妹と

背の山

加藤清正

跋

わが友水谷川柳は江戸のわたりつく田といへるはなれ小島のすなどり人なるが、をさなきころよりやしなはれたる親に孝ある事おほやけにも聞し召させ給ひて、二度までほめさせ給ひけりとぞ、身の行ひの正しかる程、此の一つにても思ひやるべし。さりとしてしはふにまめやかなるのみにもあらでいと雅びやかにたはれたるかたも立ちそひつつ朝よひの綱引のいとま硯の海におり立ちて大和もろこしの書ども広くあさりつつ世に名高き人々の言の葉ども書きつめて、弓とるかたにかしこしと聞えたる猛き武夫を初め、貞よき女の操正しきなど類を別ち墨染の袖、ゆふたすきの袂、月花を友と遊びあくがるる風流者、浮世をよそに浮れたるをさへとりまじへつつ、百人づつを撰び集へて年毎に一種二種梓に彫らせしが、今年も書肆の求めにまかせてかく一巻を物せられたり。此書どものよろしき由は、次々に世にも行はれて、人々もよく知りためれば云はず。ただその人柄のいみじさを書伝へまほしくて拙き筆をとるとなん。

嘉永二年冬

梅屋

〔解説〕「嘉永三年庚戌正月、東都書肆錦耕堂、山口藤兵衛梓」の刊記ある美濃半截判、袋綴中本を底本にした。但、題詞、漢文序及自序、北齋画五頁の口絵と文、肖像及び本文上欄の小伝逸話を省略した。肖像は北齋、国芳、芳

虎、貞秀、豊国が各二十人づつ分担して画いている。この本は前掲、英雄百人一首、烈女百人一首、続英雄百人一首の盛行を見たのに気をよくして続撰されたもの。この本に至る一連の川柳輯の百人一首は、上欄の逸話、小伝と歌とを調和させ、読みものとしての効果をあげた様式は一貫していて、いよいよ世評を勝ち得たものと思われる。この百人一首においては「武家」において一首の女性も居なかつたのを、この書では、二十四人の女性を加えて、読みものとしての効果をあげ、庶民の心を迎えようとした。いまはもう、一人一首の趣きを以て本領とする百人一首というよりは、上欄の逸話小伝と呼応して、読みものとしての効果をあげている。かるたへの向きをとらないで、読みものとしての本領を発揮して来たのである。たとえば、神西元通妻と同召仕お才の場合を見て、見ひらきに、向いあった画像と歌を出し、上欄の文章は、各頁独立せず一つづきになり、元通が籠城自刃の時、後を追おうとした妻が、さとされて遁れ、京の西山に尼となつて菩提をとぶらつていたが、信長の近臣不破某に恋慕され、とかくいなみ続けたが、ついに西川の岸に念仏して指を切り、血でこの歌を書き残して入水した。乳母もあとを追つた。召使のお才は訪ねて来て、泣く泣く亡骸を求め、貞安上人を請じてねんごろに弔い、自分も桂川に入水した。主従一丘の塚となつて世に感称の種を残したというようなものがある。

勇猛百人一首

源満昭撰
嘉永七甲寅(一八二五)刊

- 1 雲井なる人をはるかにおもふには我が心さへ空にこそなれ 六孫王経基公
- 2 君はよし行末遠しとまる身の待つほどいかがあらんとすらむ 贈従三位源満仲
- 3 かくなんと海士の漁火ほのめかせ磯辺のなみの折もよからば 源頼光朝臣
- 4 都には花の名残をとめ置きてけふ白川につたふしら雪 源頼義朝臣
- 5 君ひかざりなましかば菖蒲草いかなる根をかけふはかけまし 右衛門尉平致経
- 6 夜もすがらたたく水鶏は天の戸をあけて後こそ音せざりけれ 源頼家朝臣
- 7 夏の日になるまで消えぬうすごほり春たつ風やよきて吹くらむ 左兵衛督頼実
- 8 賤の女がしづはた布のぬきにうつうのけのぬのの程のせばさよ 源武則
- 9 思ふことなくてや春を過ぎさまし浮世へだつる霞なりせば 兵庫頭源伸正
- 10 行く人をまねくか野べの花すすき今宵もここに旅寝せよとや 平忠盛朝臣
- 11 人知れぬ大内山の山もりは木がくれてのみ月をみるかな 従三位源頼政
- 12 恋しくば来ても見よかし身にそふるかけをばいかではなちやるべき 伊豆守仲綱
- 13 今までもあればあるかの世の中にゆめのうちにも夢を見るかな 中納言教盛

武家百人一首と其の類列の百人一首

- 14 難波がた芦のまろやの旅寝にはしぐれを軒の雫にぞしる 参議平経盛
- 15 見ずもあらぬ名残ばかりの夕ぐれをことあり顔になにまさるらん 菖蒲局
- 16 山人の道のたよりもおのづから思ひたえねと雪は降りつつ 義仲妾巴女
- 17 あれにけるやどとて月はかはらねど昔の影は猶ぞ恋しき 平忠度朝臣
- 18 住みなれし古き都の恋しきは神もむかしに思ひしるらむ 正三位重衡
- 19 中々にたのめざりせば小夜衣かへすしるしにみえもしなまし 従三位平資盛
- 20 流れての名だにもとまれゆく水のあはれはかなき身は消えぬとも 左馬頭平行盛
- 21 散るぞうき思へば風もつらからず花をわけても吹かばこそあらめ 平経正
- 22 まどろめば夢にも見えつ現には忘るるほどのつかのまもなし 右大将源頼朝
- 23 いせ嶋や汐くむ袖の月影を浪に残してかへるあま 伊予守源義経
- 24 秋風に草木のつゆをはらはせて君がこゆれば関守もなし 平景季
- 25 詠めつつ幾度袖にくもるらむ時雨にふける有明の月 頼朝後室政子
- 26 物いはぬ四方のけだものすらまでも哀れなるかなや親の子を思ふ 鎌倉右大臣
- 27 世の中のあさはあとなくなりけり心のまよのよもぎのみして 平泰時朝臣
- 28 武隈の松のみどりもうづもれて雪を見きとや 人にかたらむ 河内守源光行
- 29 あたにのみ思ひし人の命もて花をいくたびをしみ来ぬらむ 宇都宮頼綱入道蓮生
- 30 いたづらに行きてはかへる年月のつもるうき身に物ぞ悲しき 式部丞源親行
- 31 思ひあればたのめ夜半も寝られぬを待つとや人のよそに見るらむ 平重時朝臣
- 32 つらかりし春の別れは忘れられて哀れとぞ聞くはつ雁の声 平政村朝臣
- 33 梅が香の誰が里わかずにほふ夜は主さだまらぬ春風ぞ吹く 行念法師
- 34 さだめなき時雨の雨のいかにして冬のはじめを空にしるらむ 真昭法師
- 35 霰ふる雲の通ひ路風さむみをとめのかざし玉ぞ乱るる 源義氏朝臣
- 36 淋しさは何処もおなじことわりに思ひなされぬ秋の夕暮 武蔵守平長時
- 37 篠の葉もさやぐ霜夜の山風に雲さへ氷るあり明の月 佐渡守藤原基綱
- 38 草葉のみ露けかるべき秋ぞとはわが袖しらで思ひけるかな 下野守藤原景綱
- 39 よしさらば我とはささじ海士小船みちひく沖の浪にまかせて 信生法師
- 40 人しれずいつしかおつる涙川あふせにかへて名を流すとも 千葉介平氏胤
- 41 山の端のみえぬばかりぞ渡津海の波にも月のかたぶきにけり 素暹法師
- 42 いにしへの野中の清水くまねども思ひいでてぞ袖ぬらしける 常陸介惟宗忠秀

- 43 行末の空は一つにかすめども山もとしるく立
つ煙かな 丹波守藤原頼景
- 44 つれなくてなにかうき世にのこらむ思ひも
いでぬ有明の月 出羽守藤原宗朝
- 45 富士の根を山より上にかへりみて今越えかか
る足柄の山 信濃守藤原行朝
- 46 奥津風吹きこす岩の松が枝にあまりてかかる
田子の浦藤 藤原宗泰
- 47 都思ふ旅寝の夢の関守はよひよひごとのあら
しなりけり 左衛門大夫藤原基任
- 48 散る花の雪とつもらば尋ねこししをりをさへ
やまたたどらまし 源 頼 隆
- 49 忘れ草ころなるべき種だにもわが身になど
かまかせざるらむ 平宗宣朝臣
- 50 大井川水も秋は岩こえて月に流るる水のしら
波 平維貞朝臣
- 51 夢ならでまたはまこともなきものを誰が名づ
ける現なるらむ 左近将監平義政
- 52 吹き払ふ嵐にすみて山のはの松より高くいづ
る月かけ 平貞時朝臣
- 53 世をすつる数にさへこそもれにけれ憂き身の
末を猶たのむとて 左衛門尉藤原頼氏
- 54 峯にたつ雲もわかれて吉野川あらしまさる
花のしら波 伯耆権守源頼貞
- 55 見し友はあるが少き同じ世に老の命のなに残
るらむ 左兵衛佐藤原範秀
- 56 軒近き松をはらふか秋の風月は時雨に空もか
はらで 平泰時室
- 57 忍ばずよしぼりかねつとかたれ人物思ふ袖の
朽ちはてぬまに 勾当内侍
- 58 をしとだにいはいぬ色とて山吹の花ちる里に春
ぞくれゆく 等持院贈太政大臣源尊氏
- 59 いつとても待たずはあらねど同じくは山ほと
とぎす月に鳴かなん 従三位源直義
- 60 妻こひに涙やおちて小男鹿の朝たつ小野の露
とおくらん 宝篋院贈太政大臣源義詮
- 61 鶴が岡木高き松を吹く風の雲居にひびくよろ
づよの声 従三位源基氏
- 62 いにしへにかはらぬ神のちかひならば人の国
まで治めざらめや 右兵衛督源直冬
- 63 春といへばむかしだにこそ霞みしか花のたも
とにやどる月かな 上野介源高国
- 64 訪はずとも障るとせめてきかすなよ待つをた
のみの夕暮の空 伊豆守藤原重能
- 65 音にだに秋にはかはる時雨かな木の葉ふりそ
ふ冬や来ぬらむ 源清氏朝臣
- 66 はつ秋はまだ長からぬ夜半なればあくるやを
しき星合のそら 播磨守高階師冬
- 67 梓弓もとの姿はひきかへぬ入るべき山のかく
れがもがな 陸奥守源信氏
- 68 定めなき身は浮鳥の水がくれて下やすからぬ
思ひなりけり 道誉法師
- 69 いたづらに待つは苦しきいつはりをかねてよ
り知る夕暮もがな 源 氏 頼
- 70 露霜の岡べの真葛恨みわびかれゆく秋にうづ
ら鳴くなり 左京大夫源氏経
- 71 都にはまだしきほどのほととぎす深き山路を
たづねてぞ聞く 伊与守高階重成
- 72 うづもれぬ煙をやどのしるべにて雪に汐くむ
里のあま 元可法師
- 73 数ならぬ身はなかなかにうきことをならひに
なして歎かずもがな 源 直 頼
- 74 頼むかなわがみなもとを石清水流れの末を神
にまかせて 鹿苑院太政大臣源義満
- 75 仮寝するいなな篠原うきふしも知らでや今宵
月にあかさむ 養徳院贈左大臣満詮
- 76 静かなる心のうちや松かげの水よりもなほ冷
しかるらむ 源頼之朝臣
- 77 逢はざりしつらさをかこつ言の葉にいまだに
ぬるる新枕かな 陸奥守源氏清
- 78 春はなほ咲きちる花の中におつる吉野の滝も
波やそふらむ 源義将朝臣
- 79 恋ひ死なぬ身のためつらき命ともさてながら
ふる契りにぞしる 陸奥守源棟義
- 80 秋来ぬと萩の葉ならす風の音に心おかるる露
の上かな 源 貞 世
- 81 日数のみふるのわさ田の五月雨にほさぬ袖に
もとる早苗かな 多々良義弘
- 82 心なき尾花が袖も露ぞおく秋はいかなる夕べ
なるらむ 源重春朝臣
- 83 澄むは空濁るは土と別れにし其の古へは神も
知るらむ 勝定院贈太政大臣源義持
- 84 霜むすぶ野原の浅茅うらがれて虫の音よわる
秋風ぞ吹く 権大納言源義嗣
- 85 ほととぎす待つ宵すぎてつれなくは明くる雲
井に一声もがな 源頼元朝臣
- 86 聞きなれし木の葉の音はそれながら時雨にか

はる神無月かな

源 高 秀

87 かこたじな春や昔の夜半の月わが身ひとつに

霞むかげかは

源 詮 信

88 夕立の雲の衣はかさねても空にすぎし風の

音かな

普光院左大臣源義教

89 思い立つ雲のよそめのいつはりはある夜嬉し

き山桜かな

源満元朝臣

90 秋深き小野の浅茅の露ながらす多葉にあまる

虫の声かな

源 持 信

91 みなの川峯より落つるもみぢ葉も積りて波を

またや染むらむ

正三位源義重

92 ひとめ見しかたちの小野に刈る草の束のままも

など忘れざるらむ

源範政朝臣

93 なほざりに詠むべしやは忘れられて物思ふころ

の夕暮の空

素明法師

94 さらにだに干さぬ袖師の浦千鳥いかにせよと

てねざめとふらむ

多々良持世朝臣

95 鳥のねのつらきばかりをうつつにてゆめにぞ

こゆる逢坂の関

平 貞 国

96 けふはまづ思ふばかりの色みせて心の奥をい

ひはつくさじ

慈照院贈太政大臣源義政

97 友もなき夜半の枕のたちばなや昔を恋ふる匂

ひなるらむ

大智院贈太政大臣源義規

98 霞とも花ともいはずはつせ山檜原にくもる春

の夜の月

常徳院贈太政大臣源義尚

99 日をそへて袖の湊もせきあへず身をしる雨の

空の乱れに

惠林院贈太政大臣源義植

100 月見ばと契りやおきしさを鹿のくる秋ごとに

妻恋ひの声

法住院贈太政大臣源義高

武家百人一首と其の類列の百人一首

〔解説〕「勇猛百人一首」袋綴中本。嘉永七年

申寅、国原屋正助（東都海寿堂）板。源満昭撰

画工芳廉とあるが共に伝未詳。肖像はいわゆる

台付。上欄に歌意を註しこれに添った小画を添

えた。本文は寛文版「武家百人一首」に作者及

び歌を五、歌を二のさしかえのされたもので、

撰者として源満昭と称するのはいささか僭上の

さたである。保昌・義家・景高・寂阿・義貞の

歌を除き、菖蒲局・義仲妻巴女・頼朝後室政子

・平泰時室・勾当内侍の五人を入れかえ、その

歌をのせた。又、源仲綱、鎌倉右大臣は、歌だ

けを入れかえた。五人まで女性の歌を入れたの

は、この本が庶民の中に入っていくためには、

女性の歌をあざなうのがよろしかろうと考えら

れたのであろう。そして、題名を「武家百人一

首」のままではと「勇猛百人一首」としたのは

よいとして、撰者を名乗るのはまずい。この

本、別に「英雄武者歌々見」と外題をかえ、色

刷表紙をつけて世に流布したとみえて、その残

欠本が跡見学園に架蔵されている。

この本かなり杜撰なところがあり38「草葉の

み」の歌、下野守藤原景綱であるのを、佐渡守

藤原基綱と誤り、97義政は義規の誤、98義直は

義規の誤、43朝景は頼景の誤。今、寛文本によ

って訂した。51義政は平義政にした方がよい。

源（足利）義政とまぎれない。これは誤ではな

いが。又、歌詞に文字のあて方を見ると、撰者

は和歌に理解の十分でない人であったと云えよ

う。たとえば

流れての灘にもとまれゆく水の哀れはかなき

身は消えぬとも

左馬頭行盛

とある第二句は「名だにもとまれ」ではじめて

意味が通るのである。また、

猶さりにながむべしとは忘れられぬの思ふ頃

の夕ぐれの空

素明法師

の初句は「なほざりに」は等閑にであって、猶

さりには何のことであろう。この歌に対して、

上欄の注は、「此の心は夕暮の空はよろづにつ

けて哀れなる物なるに、まして物思ふ頃の夕暮

は、猶更なれば忘れてもあからさまに詠むべき

事かはいへり。」とこじつけた。

「武者百人一首」が、室町期に成立し、寛文

六年に上梓され、同十二年に重版、元禄十七年

に後刷り本を上梓し、広く長く行われた。その

本文にさしかえを行なったのは、この本と五年

後に出た「武家百人一首」である。二書のう

ち、寛文本に近いのはこの本の方である。

静嘉堂文庫本の「武家百人一首」の写本及び

註釈ではこの本における、仲綱と鎌倉右大臣実

朝の歌を出し、板本及古写本等に

身のうさも花見しほどは忘れられき春の別れを

なげくのみかは

伊豆守仲綱

夕ぐれは衣手すずし高円の尾の上の宮の秋の

はつ風

源 実 朝

とあるのとちがう。即ちこの本は静嘉堂本系の

本に五人を入れかえただけのこととも考えられ

る。

武家百人一首 (B本)

賞月堂主人著
安政五年(一八五二)刊

和哥は我國の風俗として皆人のもてあそびとなれり。武門の身にしては、弓馬のいとなみしげく、外の学に心をよする暇なからまし。されども古今集の序に、貫之がかける言のはに、たけきもののふの心をもなぐさむるは歌なりといへるために、源平二つの家のみにあらず、もろもろの武将和歌をつらね侍るも多ければ、京極黄門の小倉の山莊の障子に書きおかれたる数になずらへて武士百人の歌を一つづつかきて、武家百人一首と名付侍るにこそ

- 1 雲井なる人をはるかに思ふにはわが心さへ空にこそなれ 六孫王経基
- 2 君はよし行末遠しとまる身の待つほどいかにあらむとすらむ 多田満仲
- 3 かなむと蟻のいさり火ほのめかせ磯辺の波のをりもよからば 梶津守源頼光
- 4 かたかたの親のおやどち祝ふめりこの子の千代をおもひこそやれ 藤原保昌
- 5 都には花のなごりをとどめおきてけふ下芝につとふしらす雪 源頼義
- 6 吹く風をな来その関とおもへども道もせにちる山ざくら哉 八幡太郎義家
- 7 むねにただあはぬものからみちのくのけふの細布おもひ立ちぬる 安倍貞任

- 8 我國のうめの花とは見つれども大宮人はいかがいふらむ 安倍宗任
- 9 賤の女がしづはた布のぬきにうつうのけの布の程のせばさよ 鎮守府將軍清原則武
- 10 思ふ事なくてや春をすぐさましうき世へだつる霞なりせば 兵庫頭源仲正
- 11 行く人をまねくか野辺の花すすきこよひもここに旅寝せよとや 平忠盛
- 12 人知れぬ大内山の山守は木がくれてのみ月を見るかな 源三位頼政入道
- 13 身の憂さも花見しほどは忘れき春の別れをなげくのみかは 伊豆守仲綱
- 14 けふまでもあればあるかの世の中に夢のうちにも夢を見るかな 平教盛
- 15 難波濁芦のまろやの旅ねには時雨を軒のしづくにぞ知る 参議平経盛
- 16 荒れにける宿とて月はかはらねどむかしのかげはなほぞ恋しき 薩摩守忠度
- 17 君がけふ手向の駒をひきつれて行末遠きしるしあらはせ 梶原平三景時
- 18 中々にたのめざりせば小夜衣かへすしるしは見えもしなまし 新三位平資盛
- 19 ながれての名だにもとまれ行く水のあはれはかなき身は消えぬとも 平行盛
- 20 散るぞうき思へば風もつらからじ花をわきても吹けばこそあらめ 但馬守経正
- 21 まどろめば夢にも見えぬうつつにも忘るるほどの束のまもなし 右大将頼朝
- 22 夜もすがらたたく水鶏の天の戸を明けて後こ

- 23 おとせざりけり 源頼家公
- 24 いせじまや汐くむ袖の月かけを波にのこしてかへる海士人 源義経
- 25 秋風に草葉の露をはらはせて君がこゆれば関守もなし 梶原源太景季
- 26 うき世をばそむかばけふぞそむかなんあすはありとも頼むべきかは 熊谷次郎直実
- 27 三とせ経し心づくしの旅衣あづまぢばかり袖はぬらさじ 平清宗
- 28 ちちとのみなきくらすまも蓑虫の声よわりゆく秋の風かな 小松内大臣重盛
- 29 あだにのみ思ひし人の命もて花をいくたび惜しみ来ぬらん 宇都宮頼綱入道蓮生
- 30 住みなれし古き都の恋ひしは神も昔に思ひ知るらめ 平重衡
- 31 生れては終に死ぬてふことのみぞ定めなき世にさだめありける 三位中将維盛
- 32 我庭の籬のすすき穂にいでて秋はさやかに目にぞ見えける 蒲冠者範頼
- 33 けふいでてめぐり逢はずは小車のこのわのうちになしと知れ君 曾我十郎祐成
- 34 あふとみる夢路にとまる宿もがなつらきことばにまたもかへらむ 曾我五郎時致
- 35 時鳥なく一声に思ひ出よ老曾のもりの夜半のむかしを 紀伊守範光
- 36 武士のとり伝へたる梓弓引きては人のかへるものかは 梶原平次景高
- 37 もる山のいちごさかしくなりにけりいかにうばらがうれしかるらむ 梶原三郎景茂

- 37 夕ぐれは衣手すずし高円の尾上の宮の秋のは
つ風 源 実 朝
- 38 世の中の麻はあとなくなりけり心のままに
蓬のみして 北条泰時
- 39 夕されば玉ぬく野辺の露ながら風にまづちる
秋萩の花 阿野全成
- 40 草葉のみ露けかるべき秋ぞとは我が袖しらで
思ひけるかな 尾藤景綱
- 41 幾たびか思ひ定めてかはらむ頼むまじきは
吾が心なり 最明寺時頼
- 42 重ねても猶さむぎ夜を麻衾一重だになきもの
いかにせむ 青砥左衛門尉藤綱
- 43 思ひあればたのめぬ夜半もねられぬを待つと
や人のよそに見るらむ 赤橋重時
- 44 つらかりし春の別れはわすられて哀れとぞ聞
く初かりの声 三浦政村
- 45 頼むるをまた偽とおもひても猶わすられぬ夕
ぐれの空 北条長時
- 46 篠の葉のさやぐ霜夜の山風に空さへ氷るあり
あけの月 佐渡前司基綱
- 47 定めなき時雨のあめのいかにして冬のはじめ
を空にしるらむ 真昭法師
- 48 霰ふる雲のかよひ路風さえて少女のかざし玉
ぞ乱るる 足利義氏
- 49 よしさらばわれとはささじ海士小船みちびく
しほの浪にまかせて 信生法師
- 50 山のはの見えぬばかりぞわたつ海の波にも月
は傾きにけり 素暹法師
- 51 吹きはらふ嵐にすみて山のはの松よりたかく
- 52 峰にたつ雲も別れてよしの川嵐にまさる花の
しら波 北条貞時
- 53 富士の根を山よりうへにかへりみて今越えか
かる足柄の関 土岐伯耆守頼貞
- 54 忘草心なるべき種だにも我が身になかまか
せざるらむ 藤原行朝
- 55 古里の昔を見ずはもとよりの草の原とやおも
ひなさまし 北条宗宣
- 56 待てしばし死出の山路のたびの道同じく越え
てうき世かたらん 工藤新左衛門入道
- 57 定めなき身はうき鳥の水がくれて下やすから
ぬ思ひなりけり 道誉法師
- 58 いたづらに待てばくるしき偽をかねてよりし
る夕暮もがな 六角氏頼
- 59 深き淵薄き氷のいましめを心にかけてぬ人ぞ危
ふき 楠河内判官橋正成
- 60 吾が袖の涙にやどるかげとだに知らで雲居の
月やすむらむ 新田義貞
- 61 をしとだにいはいはぬ色とて山深き花ちる里の春
ぞくれゆく 足利尊氏
- 62 いつとでも待たずはあらねど同じくは山時鳥
月に鳴かなん 足利直義
- 63 山寺の鐘の音にさへ吹きまぜておのれ声なき
峰のまつ風 赤松円心
- 64 しのばれむ折ふしごとの言の葉を哀れのこせ
るみつ莖の跡 祖禅法師
- 65 とはずとも障るとせめて聞かすなよ待つをた
のみの夕暮の空 上杉重能
- 66 音だにも秋にはかはるしぐれかな木の葉ふり
そふ冬や来ぬらむ 細川清氏
- 67 うづもれぬ煙を宿のしるべにて雪に汐汲む里
の海人びと 元可法師
- 68 数ならぬ身はなかなかうきことをならひに
なして歎かずもがな 赤松直頼
- 69 日数のみふるの早稲田の五月雨にほさぬ袖に
もとの早苗かな 大内義弘
- 70 治れることわりなれや君が代の恵つきせぬ敷
島の道 大館氏明
- 71 見し友はあるがすくなき同じ世に老いのち
の何のこるらむ 小串範秀
- 72 ふるさとにこよひばかりの命とも知らでや人
のわれを待つらむ 菊池寂阿
- 73 かへらじとかねて思へば梓弓なき数に入る名
をぞとどむる 楠 正 行
- 74 妻恋ひに涙やおちて小男鹿の朝立つ小野のつ
ゆとおくらむ 足利義詮
- 75 頼むかなわがみなもとの岩清水ながれの末を
神にまかせて 足利義満公
- 76 静かなる心のうちや松風の水よりもなほすず
しかるらむ 細川頼之
- 77 すむは空にごるは土とわかれにしその古へも
神ぞしるらむ 足利義持
- 78 霜むすぶ野原のあさぢうらがれて虫の音よわ
る秋風ぞ吹く 権大納言義嗣
- 79 あはざりしつらさをかこつ言の葉にいまだに
ぬるる新枕かな 山名氏清
- 80 春はなほ咲きちる花の中におつる吉野の滝も

- なみやそふらむ
 斯波義将
- 81 おもひきや幾瀬のよどをしをしのぎ来てこのなみ
 あひにしづむべしとは
 源 政 義
- 82 夕立の雲の衣はかさねても空にすぎしき風の
 音かな
 左大臣義教公
- 83 思はずよ花をかたみの嵯峨の山雪のあととふ
 千代のふる道
 細川満元
- 84 秋来ぬと萩の葉ならす風の音に心せかるる露
 のうへかな
 今川貞世
- 85 鶴が岡本高き松を吹く風の雲井にひびくよる
 づよの声
 足利基氏
- 86 古へにかはらぬ神の誓ひならは人の国までを
 さめざらめや
 足利直冬
- 87 露霜の岡辺の真葛うらみわびかれゆく秋にう
 づらなくなり
 斯波氏経
- 88 都にはまだしきほどの時鳥深き山路をたづね
 てぞ聞く
 大高重成
- 89 初秋はまだ長からぬ夜半なれば明るるやをし
 き星合の空
 高 師 冬
- 90 梓弓もとの姿はひきかへぬ入るべき山のかく
 れがもなし
 武田信武
- 91 みなの川峯よりおつるもみぢ葉はつもりてな
 めをまたや染むらむ
 斯波義重
- 92 一目見し片野の小野に刈る草のつかの間もな
 ど忘れざるらむ
 今川範政
- 93 時鳥待つ宵すぎてつれなくば明るる雲居に一
 こゑもがな
 細川頼元
- 94 聞きなれし木の葉の音はそれならで時雨にか
 はる神無月かな
 佐々木高秀

- 95 さらにだにほさぬ袖師の浦千鳥いかにせよと
 かねざめとふらむ
 大内持世
- 96 けふはまづ思ふ斗りの色みせて心のおくをい
 ひはつくさじ
 足利義政
- 97 友もなき夜半の枕の橘やむかしをかたる匂ひ
 なるらむ
 今出川義親
- 98 霞むとも花ともいはじ初瀬山檜原にくもる春
 の夜の月
 足利義尚
- 99 日をそへて袖の滲もせきあへず身をしる雨の
 そらの乱れに
 恵林院義植公
- 100 月見ばと契りやおきし小男鹿の来る秋ごとの
 妻恋ひの声
 足利義高公

堂主人著とは云い難いが、書肆の要請によつたものである。

この書、六孫王経基にはじまり、足利十一代將軍義澄に至つていて、首尾は寛文本と同じであり、書名も同じであるから同一本と誤られ易いが、前に述べたように、二十三首のさしかえがあり、別本なのである。

所出の人物の順序も概ね寛文本と同じではあるが、寛文本で源頼義の前にのせる源頼家を、この本では、わざわざ右大臣頼朝の次に載せて、上欄には、

「頼朝公は頼朝卿の男、母は北条政子なり。（中略）正治元年父頼朝卿薨去の後、続いて日本を掌領し給ふ。建仁二年従二位、征夷大將軍、同三年病により薙髮し、伊豆修善寺にこもり給ふ。北条時政権を専にせんため、刺客を用ゐてこれを浴室の中に殺さしむ、時に寿二十二」と略伝をかかげた。頼朝の男頼家としての伝には違ひはないが、斯の歌の作者源頼家は、金葉集の作者で、四位筑紫守、中宮進源頼光の男で、延久の頃の人。この歌は金葉集三五三に出る歌。全く別人である。いりほがというべきである。

「武家百人一首」は二つの系統があつて、跡見本の武家百人一種草稿本系で、寛文刊本の系統本。実朝、仲綱がこの本と同じ歌をもつ。今一つの系統は静嘉堂の写本及武家百人一首抄の本の系統でこれを用いたのは「勇猛百人一首」である。

義烈回天百人一首

染崎延房編輯
明治七年(一八七〇)刊

黄門定家卿小倉山莊に百首を選まれしに摸擬し、百人一首と題せし冊子、往々数種ありて、多くは兇戯の玩具のみ、適々、書肆某なる者来りて癸丑以降の英傑の詠歌を集めものして、彼の軀裁に倣してよと請ふ。最も歌を撰ぶ事輒からざる所為なれど、諸史及び口碑に伝ふる吟詠尠なからざるに、一首として報国の志を舒べざるは罕なり。是を稚童の手にふれて、常に暗誦為さんには自づから忠孝節義は勸むる端にも成りなにかと、茲に一百名を集め、尚鼈頭に小伝を加ふ。余ども、楮上狭ければ其の全伝を挙ぐるを得ず、且つ見過ち听僻めたる粗漏もなしとすべからず、看官僕が誤脱を咎め、幸ひに投書あらば忽ち改正すべくなん。

明治七年七月穀旦

染崎延房誌

- 1 さきがけて散りなんものもののふの道に句
へる花にぞありける 源 烈 公
- 2 いとはじな君と民との為ならば身は武蔵野の
露と消ゆとも 和 宮
- 3 君が代を思ふ心のひとすぢに我が身ありとも
思はざりけり 梅田 定明
- 4 誰がためのねぎごとぞとは玉くしげふたらの
山の神ぞしるらむ 安島 帯刀
- 5 ふりすてて出でにし跡の撫子はいかなる色に
露やおくらん 茅根伊予助

武家百人一首と其の類列の百人一首

- 6 見せばやな心の隈も月影もすみ田川原の秋の
夕ばえ 藤田 東湖
- 7 玉鐙の陸奥こえて見まほしや蝦夷が千島の雪
のあけぼの 登 幾 女
- 8 降りつもる思ひの雪のはれて今仰ぐも嬉し春
の夜の月 蓮田市五郎
- 9 桜田の花とかばねは散らすともなどたゆむべ
きやまとだましひ 佐野竹之助
- 10 君がためつくす心は武蔵野の野辺の草葉の露
となるとも 有村治右衛門
- 11 古里の花を見捨てて迷ふ身は都の春を思ふば
かりぞ 有村雄輔
- 12 矛とりて月みるたびに思ふかないつかかばね
の上にてるやと 森 五 六 郎
- 13 ますらをが物おもひつつ詠めけむその有明の
志賀の浦波 島 男 也
- 14 君が代のはじめの春とあらためて出づる朝日
ののどかなる影 飯田 左馬
- 15 斯くすればかくなるものと知りながら止むに
やまれぬやまと魂 吉田 松陰
- 16 君が為捨つるいのちは惜しからでたと思はる
る国の行すゑ 永井 雅 樂
- 17 武夫のやたけ心のいさをしを治まる御代に見
るぞ嬉しき 萩侯の夫人
- 18 数ならぬ身にしあれども君がためつくす誠は
たゆまじものを 僧 胤 康
- 19 曇りなき月を見るにも思ふかなあすはわが身
の上に照るやと 吉村寅太郎
- 20 思ひきや山田の案山子竹の弓なす事もなく朽
ち果てんとは 中山忠光朝臣
- 21 み簾ふかく時のきざみの言葉して今や咲くら
む九重のはな 藤本 鉄石
- 22 君が為みまかりにきと世の人の語りつけてよ
峯の松かぜ 松本謙三郎
- 23 今は只何か思はん敵あまた討ちて死にきと人
の語らば 宋戸 弥四郎
- 24 数ならぬ身にも弓矢の幸を得て都の花とちる
ぞ嬉しき 安積 五 郎
- 25 武士のやまと心を人とはば国のあらしに散れ
と答へよ 岡見留次郎
- 26 身を捨てて千代を祈らぬ大夫もさすがに菊は
折りかざしつつ 伴林 光平
- 27 大君につかへぞまつるその日より我が身あり
とは思はざりけり 野崎 主 計
- 28 古里を思ふ寝ざめに降る雨は漏らぬひとやも
濡るる袖かな 安岡 嘉 介
- 29 もろともに君のみ為といさみたち心の駒をと
どめかねつつ 荒卷 半三郎
- 30 よしあはれ枯野の露と消えぬとも魂は雲井に
有明の月 渋谷伊与作
- 31 八幡神皇国あはれとおぼしなば内外のえみし
はらひたまへや 吉田 重 蔵
- 32 いましめの縄はちしほに染るとも赤き心はな
ど変るべき 乾 十 郎
- 33 ますらをが屍をさらす草野べに咲き出て句へ
やまと撫子 都石 吉三郎
- 34 大君のみ心やすめまつらむと露の命もながら
へにけり 水郡 小隼人

- 35 露をだにいとふ倭のをみなへしふるあめりか
に袖はぬらさじ 遊女喜遊
- 36 すめらぎの御代をむかしにかへさんと思ふこ
ころを神もたすけよ 橋口壯輔
- 37 大君の御旗のもとに死してこそ人と生れしか
ひはありけれ 田中河内介
- 38 夏の夜のみじかき床の夢だにも国やすかれと
むすびこそすれ 海賀宮門
- 39 大君の為につらぬくますらをが鍛ひたにし
此のつるぎ太刀 清川八郎
- 40 天地に菊の薫れる世に逢ひて嬉しからじや猛
き国もり 飯居簡平
- 41 よしや身はいづくの浦にしづむとも魂は守ら
ん九重の庭 仙石隆明
- 42 君がため死なんと思ひ定めてはひとやのうち
はものの数かは 長尾郁三郎
- 43 臥して思ひ起きてかぞふる年月をはかなくお
くる我がいのちかな 小川佐吉
- 44 天つ風吹くや錦の旗の手になびかぬ草はあら
じとぞ思ふ 平野次郎
- 45 みがき得て国の宝となるものは人の心の玉に
ぞありける 僧 月照
- 46 五月雨のかぎりありとは知りながら照る日を
いのるころせはしき 目下部伊三次
- 47 乱れ咲きしおもひの花は散りしかどまたも青
葉の生ひしげるらん 頼 三樹
- 48 かかりしと知らぬ身にしもしら雪のつもれる
うきはいつか消えなん 飯泉喜内
- 49 鳴海がた友呼び続ぎの浜かけて千鳥も心あり
- ばにぞ鳴く 鶺鴒吉左衛門
- 50 しきしまのやまと撫子いかなればからくれな
ゐの色にさくらん 小林民部大輔
- 51 はるばると見ゆる限りをしめおきてわが物が
ほに遊ぶ野べかな 豊島泰盛
- 52 呉竹のうきふししげき世なれどもみどりの色
はかへずやあらなん 平山兵助
- 53 大君のうきを我が身にくらぶれば旅寝の袖の
露はものかは 児島強介
- 54 武蔵野のあなたこなたに道はあれど我が行く
道はものふの道 蓮田藤蔵
- 55 世の中のうきを忘れてあすからは死出の山路
の花を詠めん 山崎信之助
- 56 我もまた神の御国の種なればなほいさぎよき
けふの思い出 大石甚吉
- 57 つるぎ太刀鞘ぬきはなしますらをがきそひは
てなん時は来にけり 林田芳太郎
- 58 心のみおもひこがして文机の文を見るさへ物
憂かりけり 沢宣嘉朝臣
- 59 小倉山紅葉の色はかはらねど御幸は絶えて年
をこそつめ 美玉三平
- 60 剣太刀鞘にをさめてもののふの磨がまほしき
は心なりけり 戸原知橋
- 61 おくれなば梅も桜に劣るらむさきがけてこそ
色も香もあれ 南 八郎
- 62 世の中の人は何とも石清水きよきころは神
や知るらむ 本多小三郎
- 63 五月雨は降りまさりけり古里のわがたらちね
やいかに在すらむ 横田友次郎
- 64 事なきを祈るは人の常なれど止むにやまれぬ
今の世の中 伊藤竜太郎
- 65 乱れたる糸の筋々くりかへしいつしか解くる
御代となるらむ 木村愛之助
- 66 西の海東の空とかはれども心はおなじ君が代
のため 僧 信海
- 67 消えもせず燃え立ちもせず蚊遣り火の煙いぶ
せき世の姿かな 野村望東女
- 68 結びてもまたむすびても黒髪の乱れかかれる
世をいかにせむ 吉田大次郎
- 69 おほけなきけふの御幸は千磐破神のむかしに
還るはじめぞ 宮部鼎蔵
- 70 いつまでか晴るるを待ちて堪へやらむ乾くひ
まなき五月雨の袖 河瀬の妻
- 71 今さらに何あやしまむ空蟬のよきもあしきも
名のかはる世に 益田右衛門佐
- 72 君が為つくせや尽くせ己が身の命ひとつをな
きものにして 国司信濃
- 73 苦しきはたゆる我が身の夕烟そらに立つ名は
すてがてにして 福原越後
- 74 今はや言の葉ぐさも夜の露と消えゆく身に
はなりにけるかな 佐久間佐兵衛
- 75 朝夕に手なれしものに別るるや浮世の夢の見
はてなるらむ 宍戸右馬介
- 76 君が為つくす心の直なるは空ゆく神やひとり
知るらむ 松島剛蔵
- 77 終に行く道とは聞けど梓弓春をも待たぬ身と
ぞなりける 大谷正道
- 78 いにしへに吹きかへすべき神風を知らでひる

- 子らなにさわぐらむ 姉小路公知卿
 79 はかなくも三十路の夢はさめてけり赤間が関
 の夏の夜の空 錦小路頼徳朝臣
 80 議論より実を行へなまけ武士国の大事を余所
 に見る馬鹿 来嶋亦兵衛
 81 ほととぎす血に啼く声は有明の月より外に知
 る人ぞなき 久坂玄瑞
 82 この春は都の花にあくがれむおくれず咲けよ
 庭のさくら木 原 陸 太
 83 大山の峰の岩根にうづみけりわが年月のやま
 とだましひ 真木保臣
 84 橋のほひ流せし湊川水しなけれど袖はぬれ
 つつ 酒井正之助
 85 雨風に散るともよしや桜花君が為には何かい
 とはむ 山本誠一郎
 86 わが太刀の折れぬ限りを命にて薙きはてなま
 し醜のしこ草 安藤鉄馬
 87 かねてよりおもひそめてし真心をけふ大君に
 つげて嬉しき 藤田小四郎
 88 片しきていぬる鎧の袖の上におもひぞ積る越
 のしら雪 武田伊賀守
 89 思ひかね入りにし山を立ちいでてまよふ浮世
 ぞ大君のため 伊藤栄太郎
 90 東路をいでて日数をふる雪のいつか思ひのと
 げずやはある 黒沢五三郎
 91 仮の世にすみの衣は着つれども心はあかきや
 まとたましひ 僧 赤 城
 92 進みいでて嵐にむかふものふはけふを限り
 の死出の山みち 福島男也

武家百人一首と其の類列の百人一首

- 93 秋霧の立ちへだつとも久方の雲の上にて逢は
 むとぞ思ふ 毛利強兵衛
 94 もののふの捨つる命は何故ぞ高き名を得て君
 にささげむ 篠崎勘七
 95 から人は死してぞやまめ我はまた七世をかけ
 て国につくさむ 富田四郎太
 96 大君の大御心をそよとだも東風吹くかぜの我
 にしらせよ 東久世通禰朝臣
 97 玉の緒は浮世の塵と消えぬとも君に知られば
 うれしかるべき 壬生基修朝臣
 98 しきしまのやまと心を種として読めや人々か
 ら国の書 河越少将
 99 玉の緒はよし絶えぬとも惜しからじすめら御
 国のみ為なりせば 毛利之純朝臣
 100 手馴れつる玉の小琴の緒をたたむ古りし調べ
 は聞く人もなし 参議安芳朝臣

御製
 朝な夕な民安かれと思ふ身のころにかか
 る外つ国の船
 長門にありて詠じ給ふ
 大君はいかにいますと仰ぎ見れば高天原に
 霞こめたる 藤原実美公
 参朝の節詠じられたる歌
 玉の緒はよし絶ゆるとも一筋に吾大君のみ
 こと定めむ 徳川家茂公
 と上欄にかかげた。序によって撰輯の意途を明
 らかにすることが出来る。維新の志士で漏れた
 と思われる人々もあるが、ひろく百人を集め
 た。歌は、烈公の「さきがけて散りなんもの
 は」の初句「咲きがけて」としたような誤りも
 ないではないが、比較的忠実に伝えられている。
 頭書の略伝は簡明で要を得ている。川柳も
 ののように物語的な逸話、所掲の歌の背景な
 ど、必ずしも詳しくしないのはかえってよい。
 歌は烈公德川斎昭から、海舟勝安房まで、主
 として明治維新前後、殉難の烈士の歌を輯めた
 が、和宮・登幾女・萩侯夫人・遊女喜遊・野村
 望東尼・河瀬某妻女など、六人の女性の歌も加
 えた。概ね武弁の人、歌は必ずしも本領とする
 処でないから、
 議論より実を行へなまけ武士国の大事をよそ
 に見る馬鹿 来島亦兵衛
 というような、歌としてはいかがかと思われる
 ものもあるが、東湖・松陰・光平・玄瑞・保臣
 などを洩らさない。

武家百人一首(Ｃ本) 富田良穂撰 明治四二年(一九一九)刊

武家百人一首序

玉葉集に藤原為相卿が、これのみは人の国より伝はらで神代をうけし敷島の道とうたはれしことの如く、歌はわが御国の人は神代より受継来たり。喜怒哀樂の情の発る時、知らず知らず発るもの歌なりけり。見よ、おほくは保元平治の昔より建武中興の時、元龜天正の頃、天の下麻の葉の乱れに乱れにて、治まる時なき世に生長し、弓矢手挟み矛とる術のみ習ひし武士は、茨からたち生ひたる中も切り拓き、磐が根木の根踏みならし、道ある世ぞと敷島の倭心をふりおこし、折にふれ月花のあはれを見ては哀れと歌ひ、いまはの時に臨みては事ともせず思を陳べて身まかりぬ。かかる英雄豪傑烈女の歌はれし歌を輯めて百首になりぬ。その人の略伝をいささか書き加へて武家百人一首とす。一つは斯道を踏む者のしるべとし、一つは文学衰へたる折の人すら斯く歌ひ出でられたるは、文学盛りなる大御代に生れ出でたる者の、いかでか大和心を振り興さざらめや。是れ即ち為相卿がいはれし歌は外国より渡り来しものにあらず、み国に生れ出でたるものなれば、知らであるべからざることを知らしめむとなん。時は明治の四十三年、二月の二十日、杉之戸の主。

武家百人一首

- 1 近江の海瀬田のわたりにかづく鳥目にし見え
ねはいきどほろしも 武内宿禰
- 2 君はよし行末とほしとまる身の待つほどいか
にあらむとすらむ 源満仲
- 3 わが国の梅の花とは見たれども大宮人はいか
がいふらむ 安倍宗任
- 4 みちのくの里は遙かにとほくとも書きつくし
てよつぼの石ぶみ 源頼朝
- 5 あきつ島神の治むる国なれば君しづかにて民
もやすけし 源仲綱
- 6 六道のみちのちまたに待てよ君後れ先だつな
らひありとも 武蔵坊弁慶
- 7 後の世もまた後の世もめぐりあへそむ紫の雲
の上まで 源経
- 8 さつま湯沖の小島に我ありと人には告げよ八
重の汐風 平康頼
- 9 五月闇くらはし山のほととぎす姿を人にみす
るものかは 後藤兵衛尉守長
- 10 吹く風をな来その関と思へども道もせに散る
山ざくら花 源義家
- 11 生れてはつひに死ぬてふ事のみぞ定めなき世
に定めありける 平経盛
- 12 ゆきくられて木の下かげを宿とせば花やこよひ
の主ならまし 平忠度
- 13 ありあけの月も明石の浦かぜに波ばかりこそ
よると見えしか 平忠盛
- 14 み山木その梢とも見えざりしさくらは花に
あらはれにけり 源三位頼政
- 15 いまぞしる御裳濯川のながれにて浪の底にも
都ありとは 二位尼
- 16 道のべのくさのあをばに駒とめてなほふるさ
とをかへりみるかな 播磨中将盛憲
- 17 故里を恋しくもなし旅のそら都もつひの住家
ならねば 三位中将平重衡
- 18 武士のとりつたへたる梓弓ひきては人のかへ
るものかは 梶原景時
- 19 帰り来むこともかただに引くあみの目にあま
りたるわが涙かな 平時忠
- 20 折々はしらぬこちの藻塩草かきおく跡をか
たみとも見よ 三位中将維盛
- 21 すみなれし都の方はよそながら袖になみこす
磯の松風 新中納言知盛
- 22 君すめばこども雲居の月なれどなほ恋しきは
都なりけり 平大納言時忠
- 23 出づる日のいるをまたぬ世の中にまた来む
春はたのまればこそ 梶原源太景季妻
- 24 照る月を弓はりとしもいふことは山のはさし
ているばかりなり 梶原景季
- 25 武士のとりつたへたる梓弓ひきては人のかへ
すものかは 梶原景高
- 26 武士の矢なみつくろふこての上に霰たばしる
那須の篠原 源実朝
- 27 待てしはし死出の山べの旅の道同じく越えて
うき世語らむ 普恩寺前相模入道信認
- 28 白妙にふりつむ雪はたのしまでつきこと積る
旅まくらかな 北条時頼
- 29 花咲かぬ老木のさくらくちぬともその名はこ

- 30 待てしばし子を思ふやみに迷ふらむ六つの巷の道しるべせん 本間資忠
 31 住みすつる山をうき世の人とはば嵐や庭の松にこたへむ 藤原藤房
 木々の葉はいつかあらしに散りはててあきつ
 の山は名のみなりけり 楠正成
 33 武士の矢たけ心の一すぢに思ひたつとは神やしるらむ 菊池武時
 34 皆人の世にある時はかずならでうきにはもれぬ吾が身なりけり 佐介左京亮貞俊
 35 たれみよと形見を人のとどめけむたへてあるべき命ならぬに 貞俊妻
 36 身のうさはさもあらばあれ治れる世をみる迄の命ともがな 北畠親房
 37 梓弓我こそあらめ引きつれて人にさへうきめをぞ見せつる 足利直冬
 38 みちのくの安達の真弓とりとめし其の世につかぬ名をなげきつつ 北畠守親
 39 無き名ぞと人にはいひてありぬべし心の問はばいかに答へむ 細川頼之
 40 いかにして伊勢の浜萩吹く風の治まりにぎと四方にしらせむ 北畠顕能
 41 帰らじとかねて思へば梓弓なき数にいる名をぞとどむる 楠正行
 42 帰るべき道しなれば位山のぼるにつきてぬる袖かな 宰相中将義詮
 43 故郷はこよひばかりの命ぞと知らでや人の我を待つらむ 菊池武光
- 44 かげ寒き枯野のくさの霜の上に月すみわたる冬の夜のそら 大館氏明
 45 散る花をせめてたもとに吹きとめよそをだに風の情と思はむ 今川貞世
 46 くらみ山あとは昔にかはれども帰らぬ道はいまもかなしき 足利満詮
 47 あたなりと思ひし花のよはひさへ羨しくもあすをしるかな 足利義照
 48 あめしばしくもにやすらへ木幡山伏見の花を 大内義弘
 49 へだてなき心は玉のごとくにてかどのなきには吾に敵なし 北畠満雅
 50 無き身とはたれもしれども諸共にいまはにおよぶ事をしぞ思ふ 中村治部少輔
 51 老のやみよるよる思ひ続ければ六十の関もなかばなりけり 三浦義同
 52 おろかにも猶治まれと思ふかな斯く乱れたる世をばいとほで 足利義政
 53 都いづる名残は誰としらねどもひかるるとのみ思ふ袖かな 伊達成宗
 54 いづこより年のこなたの春霞立ちきてけふのいろやそふらむ 毛利元就
 55 清見濁そらにも関のあるならば月をもこめて三保の松原 武田晴信
 56 日の本にまた韓国も手に入れてゆたかなる世の春に逢ふかな 豊臣太閤
 57 もののふの鎧の袖を片敷きて枕にちかき初雁のこゑ 上杉謙信
 58 となふなり声とぞならずかりありてあたをば
- 59 早くちりちりにして 北畠具就
 60 もの風散らぬまに 太田資高
 61 かねをば岩屋の苔にうづみてぞ雲井のそらに名をとどむべき 高橋紹運
 62 わが君の命にかはるたまのをを何いとひけむ武士の道 鳥居勝高
 63 いそがずはぬれざらましを旅人のあとより晴るる野路の村雨 源持資
 64 足引の山のあらしはたえはせずおのれとなびく朝がすみかな 細川玄旨
 65 武蔵野といづくをさして分けいらむゆくもかへるもはてしなれば 北条氏康
 66 出づるよりいる山の端はいづくぞと月にとはばや武蔵野の原 伊達政宗
 67 おこたらず行かば千里の果もみむ牛のあゆみのよし遅くとも 徳川家康
 68 わが岡にたれか植えけむ一つ松心して吹け志賀の浦風 明智光秀
 69 昔よりしほをうつみのうらなれば報いを待てよ羽柴筑前 織田信孝
 70 嬉しさのありとや人の思ふらむうきをうきとも嘆かれぬ身は 北畠信意
 71 哀れともとふ人あらでとふべきか嵯峨野ふみわけおくの古寺 熊谷直之
 72 鳥なきて今ぞおもむく死出の山関ありとても吾などがめそ 小野寺重勝夫人
 73 さらにぬだにうちぬるほどは夏の夜の別れをさそふ時鳥かな 柴田勝家夫人

- 73 夏の夜の夢路はかなぎあとの名をくもるにあ
げよ山時鳥 柴田勝家
- 74 思ふどち打ちむれつつも行く道のしるべや死
出の山時鳥 中村文衛齋
- 75 雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして
月をみるかな 那須資為
- 76 今はただ恨みもあうじ諸人の命にかはるわが
身と思へば 別所長治
- 77 諸共にはつる身こそは嬉しけれおくれ先だつ
習ひある世に 別所長治妻
- 78 命をも惜しまざりけり梓弓末の世までの名を
思ふ身は 別所友之
- 79 君なくばうき身のいのち何かせんのかりてか
ひのある世なりとも 三宅治忠
- 80 靡くなよわがませ垣の女郎花をとこ山より風
は吹くとも 細川忠興
- 81 吹きと吹く風ならむこそ花の春紅葉の残る秋
ならばこそ 北条氏政
- 82 世にへなばよしなき空も蔽ひなむいざ入りて
まし山のはの月 鳥居与七郎妻
- 83 いにしへを記せる文のあともなしさらずは降
る世とも知らじを 三好冬康
- 84 一度は都の月と思ひしにわれ待つ宵のくもと
かくるる 三村元親
- 85 世の中をめぐりもはてぬ小車の火宅の門をい
づるなりけり 佐久間盛政
- 86 中々にききてかれぬるものならばたが為なら
むはたものの上 黒田長政妻
- 87 露の身の消えても消えぬおきどころ草葉の外

- にまたもありけり 木下長嘯子
- 88 限あれば吹かねど花はちるものを心みじかし
春の山嵐 蒲生氏郷
- 89 武士の弓矢とる名のたかみ山なほいく度も越
えむとぞ思ふ 源頼宣
- 90 てをわけてみねばこそあれ武蔵野の芝生がく
れの花のいろいろ 徳川家光
- 91 登りては猶つつしめよ位山あとな忘れそ道の
ふもとを 源治貞
- 92 人の上は鏡にかけてみるとがの我身のかげの
など曇るらむ 島津義弘
- 93 北みなみそれとはしらぬ紫のゆかりばかりは
末の藤原 脇坂安元
- 94 待てしばし死出の旅路のなれずともわれさき
がけて道しるべせむ 徳川吉宗
- 95 見ればただ何の苦もなき水鳥の足にひまなき
わが思ひかな 徳川光圀
- 96 われもまた神のみ国の種なれば猶いさぎよき
けふのおもひ出 大石良雄
- 97 武蔵野のくもともみえず故郷の妹が垣根の草
やもゆらむ 小野寺秀和
- 98 夫や子の待つらむものをいそがまし何かこの
世に思ひ置くべき 秀和妻丹女
- 99 風さそふ花よりも猶われはまた春のわかれを
いかにとかせん 浅野長矩
- 100 近江の海いそうつ波のいくたびか御代に心を
砕きぬるかな 井伊直弼

かげた。やや時代順に排列している。撰揖は多
少杜撰である。例えば武内宿弥の歌の第五句、
「生きのふらしも」は意をなさず、「いきどほ
ろしも」の誤である。又、

18 武士のとり伝へたる梓弓ひきては人のかへ
るものかは 梶原景時

の歌は、25 梶原景高と同一のものを出し、景時
の註に「平家物語には景高の歌とす」と記し、
撰者は承知の上である。疑しくば別歌を撰ぶ
か、省略すべきであろう。

75 雲はみなはらひはてたる秋風を松に残して
月をみるかな 那須資為

に至っては甚しい。新古今集4一八の藤原良
経の歌である。他にも誤はある。撰者富田長穂
は豊橋市大字東八三三番戸の人。この本私家版
で四六版の小冊。明治四十三年一月二十五日出
版である。

日露戦争後に、一種の尚武の精神が社会にみ
なぎって、このような百人一首が撰ばれる機運
が出来たと云えよう。この「武家百人一首」は
前掲同名の書とは全然別種の本である。

この本、作者の略歴を註しているが一行程度
で、物語的要素にはならない。にもかかわらず
梶原景季と同妻、弁慶と義経、佐介貞俊と同妻
勝家とその夫人、別所長治と妻別所友之、小野
寺秀和とその妻など、贈答又はこれに類するも
ののあるのは、百人一首本来一首一首が独立す
るといふ構成にはそわないものと思われる。こ
の撰者他にも「百人一首」の撰あり。

〔解説〕活版本による。作者の略歴と出典をか